少年は『無理ゲー』の先に何を掴むのか？

ポチ甲乙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
少年は『無理ゲー』の先に何を掴むのか？

【Ｎコード】
Ｎ３２１７Ｔ

【作者名】
ポチ甲乙

【あらすじ】
裕福な家の息子である早瀬玲斗は、重度のゲーマーだった。そんな玲斗が飛ばされたのは、親友が持ってきた『改造ゲーム』の世界。最強主人公設定を手に入れた玲斗と親友に待ち受けていた現実は。
――これ、実は『無理ゲー』なんだ。
――その先にあるのは世界の崩壊。つまり……。
タイムリミットは三ヶ月。それまでに日本円にして三億を稼ぎ、魔法で脱出するしかない。

『魔法＝お金』の世界で、人間不信気味なチート高校生の荒稼ぎ生活が始まった。

プロローグ（前書き）

初めまして、ポチ甲乙です。
ノリで始めた自作小説。至らないところも多々あるでしょうが、どうか生暖かい目で見守ってやって下さい。
目標は、最低週一更新ですが、戦闘描写は異常なまでに筆が進みます。
では、始まり～。

プロローグ

○プロローグ

――端的に言うと、『改造』や『チート』が大嫌いなのである。

「……『我は「コレ」を改造した。戻して欲しければ「コレ」をクリアし、我を越えて見せよ。フハハハハハハ』……だと？」

自室。高校から帰宅して制服から着替えた後、勉強机に携帯ゲーム機とそのソフト、更に手紙が置いてあるのを見つけた。この、無駄に高級品の家具で装飾された部屋の主、早瀬玲斗（はやせれいと）は手紙の序文を声に出して読んで、盛大な溜息をつく。

今日体調不良で学校を早退した親友が、病人のくせにニヤニヤしていた理由を知って玲斗はふつふつと沸き上がってくる怒りを感じていた。

（ったくアイツは！　次会ったらどうしてくれようか）

玲斗はゲーマーだ。

戦略を練って、寸隙を縫って勝利を掴むことに面白みを見出している玲斗にとって、圧倒的な暴力は言わば邪道だった。これはゲーマーとして、例え親友にも譲れない信念。

一つ、深呼吸。

横目で『マジック＝マネー』だったものを見る。『マジック＝マネー』は、そのタイトルの通り、魔法をゲーム内通貨で発動する、と言うのが売りのゲームだった。プレイヤーの自由度は高く、魔物狩りから武器の生産、商売、町興しなどができる。

ネーミングセンスが残念なのを棚に上げれば、玲斗は現実では決して味わえない、許されない『自由』を『マジック＝マネー』で満喫していたのだ。

（でも、一周しないと本当に戻してくれんだろうしなぁ……）

何とか溜飲を下げて冷静になると、結局そんな解決になっていない結論しか出なかった。　どうにも最近、親友、堀川圭祐（ほりかわけいすけ）は露骨に『改造ゲー』を薦めてくる節があった。頑なに断っていたのだが、これも圭祐のゲーマー魂か。はたまたハマってしまったのか。

頭の片隅でそんなことを思いつつ、流すように手紙の続きを読み始めた。

が。

気が付けば玲斗は食い入るように読み込み、最後の「。」に到達した瞬間、神速とも思われる速度で机の上のソフトを端末に差し込んだ。シャー、と軽快にディスクが回転する音を聞き、玲斗は思わず苦笑する。

（不本意だけど……なかなか面白そうじゃないか、圭祐）

彼の『改造』は、初め玲斗が想像したものとは大きく異なるものだった。

曰く、設定を追加したオリジナルストーリー。

曰く、魔法の制限はあるが、複数の魔法を組み合わせることで臨機応変な戦闘を味わえる。

曰く、最強の魔物を討伐せよ。

とのこと。

なかなかそそられる設定だった。

圧倒的な力を『振るう』のではなく、『振るわれる』。別段玲斗に特殊な性癖があるわけではないが、自分よりも高位の存在を叩き伏せることこそ、彼が仮想空間に求めるものだった。

――自分は決して、運命に逆らうことは出来ないから。

急速に気力が萎えていくのを感じ、玲斗は頭を振った。

――コツ、コツ。

玲斗は音を立てずにゲームを机に置き、引き出しから黒光りする物体を取り出す。

弾が装填されていることを確認。

リロード。

安全装置に指をかけ、いつでも外せるよう構える。

意識しているわけではない。玲斗が中学生の頃から身に着けた護身術だ。

気配を消さないまま銃をドアに向かって構え、足音が大きくなるのを静かに聞いていた。

やがて、足音は玲斗の部屋の前で停止する。

三回の、軽いノック。

「玲斗様、ご主人様から本日の晩餐会は必ず出席して欲しい、とのことです」

柔らかくもハキハキとした、若い声がドア越しにくぐもって響いた。

それは一年前、玲斗が高校に入学したときに雇われた女性メイドのものだ。しかし、玲斗が拳銃を降ろすことはなかった。

「わかった。用意はしておく。ありがとう」

努めて高校二年生男子らしい陽気さで了解と謝礼を述べる。すると、「失礼します」という言葉と共に、一定のリズムで足音は遠ざかっていった。

一息つくと、拳銃――ＳＯＣＯＭ・Ｍｋ－２３を机に置く。

再び椅子に腰掛けながら、昨夜父に、グループ上層部と連携している企業のお偉方が集まってパーティーを開くと言っていたのを思いだした。また疲れるのかと、憂鬱な気持ちになる。値踏みする目、取り入ろうとする目、憎悪を孕んだ目。こればっかりは、なかなか慣れるものではない。

――誰も簡単に信用するな。

それは恩師の言葉であり、玲斗自身の戒めでもある。

取り返しの付かない失敗は、二度としたくない。

（……やめだ。ゲームしよう）

両親は決していい顔はしないが、これだけは黙認してくれている。

ゲーム機を手にとってボリュームを上げると、管弦楽器の重厚なBGMが流れ、さっきまでの陰鬱な気持ちもどこへやら。新たな期待感が玲斗の心を満たしていった。

装飾された『MAGIC＝MONEY』がでかでかと踊るタイトル画面で、『START　BUTTON』を押し込み。

現れたアイコンの内、『NEW　GAME』を選んで『〇ボタン』を押した。

瞬間。

「うわっ」

画面が原色を高速で明滅させる。

咄嗟に目を閉じても、玲斗は瞼に強烈な光の奔流を感じていた。

（――っく、開始早々バグってるじゃんか！　機動チェックくらいしろよ）

内心で愚痴る玲斗には、何畳もある部屋を煌々と照らして自分を包み込んでいく光球にも、僅かばかりの浮遊感にも、気付くことは出来なかった。

００１話

○第一章・００１

「……う、ぅん？」

強烈な光に当てられた玲斗は、自分の部屋からは香るはずのない匂いに顔をしかめた。鼻をつくのは、玲斗自身余り嗅いだことのない、強烈な若草の匂い。瞼は持ち上がることを拒んでいたので、今は自然になるようにさせている。が、頭上から降り注ぐ淡い光は、人工の照明などではなさそうだと感じた。加えて椅子に座っていたはずの身体も、いつの間にか大の字になって寝転んでいる。

明らかな異常を感じた玲斗は、上体を起こしながら目を擦り、視力の回復に努める。何度か瞬きして焦点を外界に合わせた。

「……どこだ、ここ」

思わず漏れるベタな台詞も、仕方のないことだろう。

まず飛び込んできたのは、眼前に幾本も不規則に立ち並ぶ木々だった。葉は美しい浅緑に色づき、天に向かって枝を伸ばしている。真上には、さんさんと照りつける太陽。その周りに広がる蒼は、木々に隠れて見えなかった。そのまま身体を捻って後ろに視線を移しても、やはり木ばかりが続いている。

（ふむ。夕方自分の部屋にいたのに、いつの間にか真っ昼間の森の中で昼寝をしていた、と）

「そんな馬鹿な！」

滑稽にも一人ボケ突っ込みをするのだが、玲斗はそれどころではなかった。

慌てて立ち上がると、ドサッと地面に何かが落ちた。

「これは、俺のＭｋ－２３じゃんか……」

周りをよく見ると、玲斗は息を飲んだ。

教科書、文房具、本、辞書、クリアファイル、白の通学用鞄……。

勉強机周辺に置いてあった物が、若草の上に散乱している。

（なんだコレ……）

目の前の怪奇現象。抜けそうになる腰や震える手を押さえつけた。陽光を反射して金属光沢を放つ大型拳銃を手に取り、弾を確認する。最大装填数である十二発分、しっかり入っていた。起きたままの撃鉄（ハンマー）をゆっくりと戻す。

安全装置をかけ直し、玲斗はベルトを弛めてＭｋ－２３を挿す。身を守るための道具が確保できたことに、一先ず安堵を覚えた。

（でも、本当にここはどこだ？）

可能性としては、誘拐。一番にそれを疑うのは、玲斗の境遇から考えると当然のことだろう。

しかし、玲斗はすぐにそれを否定する。

（誘拐だとしたら俺を放置するわけがない。脇に拳銃を置いておくこともないはずだ。教科書も、説明が付かない）

周囲を警戒しながら、白の鞄に使えそうな物を詰め込んでいく。

「筆記用具に懐中電灯、予備の弾倉はいるな。サバイバル生活も考えると、燃料になる紙もいるか」

小鳥がさえずりながら空を飛び、穏やかな風に草木が揺れる。

のどかな雰囲気に、玲斗は思わず溜息を漏らした。

（平和だ……いかん。警戒を怠っては）

パシン、と頬を叩いて気合いを入れ直す。

あらかた整理し終え、チャックを閉めた。

――ガサッ。

どこだっ！？

何かの接近を察知した玲斗は肩に担ぎかけた鞄を落とし、腰から

拳銃を抜いた。

軍人顔負けの速さで撃鉄を起こし、安全装置を解除。

この、ダブルアクション式の拳銃を扱う時、注意するのは二つ。

一つ、トリガーをしっかり引いて、弾詰まりを防ぐこと。

二つ、全身で反動をいなすこと。

足を肩幅に開き、両腕を突き出して構える。

音が聞こえた、右斜め前方の藪を狙う。

「……ふぅ……ふぅ……」

呼吸を最小限に、それでも乱れないように繰り返す。

玲斗は神経を聴覚に集中させた。

人か、動物か。敵か、味方か。

――ガサッ、ザッ、ザッ……。

徐々に大きくなる足音。

揺れ始める藪。

早鐘を打ち始める心臓。

冷や汗が玲斗の頬を伝う。

現前の藪が、大きく揺れた。

瞬間。

何かが飛び出した。

「――っ、動くなっ！」

驚き、若干上ずった声で、玲斗は警告を発する。

力を入れたがる、トリガーに掛けた人差し指を押しとどめられたのは、出てきたシルエットが人のものだったからだ。

そして、玲斗は息を飲んだ。

スラリとした引き締まった体躯に、長い手足。幼さの残る色白の整った顔は白磁のように滑らかそうで、高く結い上げた燃えるような赤い髪が際立っている。二重の瞼にぱっちりとした菫色の瞳に、玲斗は思わず引き込まれそうになった。

突如現れた自分と同年代ほどの美少女に、玲斗は困惑してしまう。

その人物が纏っているのは、西洋風の防具。白銀に煌めくそれは、銅、腰、肩、肘、膝、急所と関節を守る軽装。インナーは白を基調とした落ち着いたものだったため、左胸の紋章が映えていた。

紋章。

金で縁取られた盾に重なる、一羽の鷲のシルエット。

（……あ、あれは。いや、まさかそんな）

そんなわけ無いと思うが、それに玲斗は見覚えがあった。

――『マジック＝マネー』に出てくるキャラクター、『王立魔法騎士団』のシンボルマーク。

少女は動けない玲斗を見て、一瞬目を見開いたが、意を決したように口を開いた。

「お金を貸してください！！」

◇◆◇◆◇

「ハァ、ハァ……ッ、ハッ」

すこし前。

赤い髪をポニーテールに纏めた少女、フェルシア＝インクラットは全力で走っていた。

草木をかき分け、太い木の幹を飛び越える。

左右の景色が、後方に向かって飛ぶように去っていった。

（……拙いっ、もう限界？）

体中に漲っていた力が、徐々に薄れていく。歯を食いしばって腰のポーチに手を伸ばした。まさぐり、幾つか手に触れた硬い物体を全部引っ張り出す。

それを横目で見て、絶句した。

「もうこんだけしか無いの！？」

右手に握っていたのは、五センチほどの長さで硬質の六角柱。鈍い金属光沢を放つそれは、銀色が一本、銅色が六本、鉛色が二本。

（学園まで持つかしら……）

乱れる呼吸を必死に整えるため、溜息すらつけなかった。

――グルルルルルゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥ

背後から轟くうなり声に、反射的に首をすくめる。

つい、その声の主に襲いかかられる自分を想像して、膝が笑いかけた。

（背に腹は代えられないわ）

フェルはおもむろに右手から銅色の結晶を二本引き抜くと、左手で握りしめ、透明の膜が自分を覆う様を想像する。

すると。

左拳――正確にはその中の結晶が発光し、淡い光が辺りを照らした。

光はやがてフェルの周りに集まり、ぴったりとフェルに張り付く。

光が収まる頃には、再び沸き上がってくる力を感じていた。

軽くなったように感じられる身体で、再び地面を蹴る。

（よし、《肉体強化》完了。後は学園へ逃げ込めば……逃げ込めば？）

後ろから追ってくる『ヤツら』を引っ張って学園へ入るのか。

危険すぎる。

（せめてお金が、銀結晶があと五本あれば……）

右手の銀の六角柱を思いっきり睨み付けるてみるが、自然に増えるわけがない。

そうこうしている間にも、獰猛な『ヤツら』は確実に、フェルとの距離を詰めていた。彼女との差が『ゼロ』になったら最後。人生を終えるには、十六という年齢では早すぎる。

振り切ることは出来ない。

討伐することも難しい。

避難も出来ない。

地獄のチキンレースを延々と繰り返し、フェルの精神はもう限界に近かった。

せめて最後くらい、派手に散ってやろうか。

自虐的な考えに、思わず苦笑いする。

（でも、もう無理か。元気でね、アレク）

脳裏に浮かぶブロンドの美少女に微笑みかけた。

その時。

「――っ、動くなっ！」

森の奥、少し開けた場所に仁王立ちになる少年を見つけた。

明らかに敵意むき出しだが、フェルは「助かった」と胸をなで下ろす。

何とか緩む緊張感を引き締め、思いっきり、頭を下げた。

「お金を貸してください！！」

銀結晶五本。

なかなかのお金だが、仮にもここは森の中。

いつ魔物が出てもおかしくない場所で、少年が銀結晶すら持っていないはずがない。

多少特殊な身なりの少年には些か申し訳ないが、フェルほどの腕前の騎士が後ろの『ヤツら』を狩れば、倍になって返ってくるだろう。

が、安堵する少女の意に反して、まったく予期していなかった返答が、黒髪の少年から返ってきた。

「……スマン。俺、無一文なんだ」

え？

「……」

「……スマン」

唖然とするフェルに、少年はポリポリと頬を掻いてそう繰り返す。

気まずい空気が辺りに流れた。

瞬間。

――ヴァルゥゥゥウウウ

黒い影が、森の奥から飛び出してきた。

◇◆◇◆◇

少女のあまりの必死さに、カツアゲされかけたにもかかわらず、

玲斗は謝ってしまった。

次いで、キョトンとする美少女に対し。

「……スマン」

ふと、そこで自分が未だ拳銃を突きつけたままだということに気が付いた。

攻撃の意志は無さそうなので、とりあえず銃を降ろして、ここはどこか尋ねようとした瞬間。

――ヴァルゥゥゥウウウ

「――っ、なっ！」

黒い影が飛び出し、玲斗の左前方に着地した。

強靱な四本の脚。
二つに分けた揺れる尻尾。
体中を覆うグレーの剛毛。
大きく裂けた口から、無数の牙が覗いている。
そして何より。

（四つの、深紅の目を持った、狼！？）

絶句する玲斗。

爛々と煌めく二対の瞳は、玲斗と少女、双方を同時に睨み付けていた。

そして、玲斗はその狼に見覚えがあった。

いや、知っていた。

（『フォウアイズ・ウルフ』……間違いない）

あれは、『マジック＝マネー』に現れる魔物だ。

そこまで思考が追いついた瞬間、《四つ目狼》は地を蹴った。

少女に向かって。

「――危な」

「ハァアッ！」

発する警告を押しのけ、凛とした雄叫びを上げて、少女は腰の剣を一気に引き抜いた。

そのまま流れるように、《四つ目狼（フォウアイズ・ウルフ）》の爪を横っ飛びに躱す。

絶句する玲斗。

少女の動きの速さは、もはや人間離れしていた。

一瞬少女の身体がぶれたように見えたのだから。

赤い髪を揺らして着地する少女。

丁度玲斗の右に並び、少女は《四つ目狼》を睨み付けた。

「――炎よっ！　踊れ」

少女は左手の持ち替えた片手剣の剣先を《四つ目狼》に向ける。

その凛々しい姿に、玲斗は一瞬目を奪われ掛けたが。

少女は細い右腕を振り、何かを放り投げた。

玲斗は横目でそれを追い。

（銀色の、宝石？）

陽光を反射する銀色の結晶は緩い放物線を描き。

直後。

弾けた。

「――うわっ」

しっかり見ていた玲斗は、放たれる光に眼を細める。

そして、白銀の光は一瞬で。

燃えさかる、紅蓮の炎に変わった。

突如襲い来る熱波に、玲斗は慌てて距離を取る。

銃の火薬に引火したら暴発するから。

超常現象に直面しても頭が回ることに、場違いな安堵を覚える玲斗。

中空で暴れ狂う劫火は、直下の雑草を焦がしながら、少女の剣に集まる。

《四つ目狼》は身を屈め、じっと目の前の人間を睨み付けていた。

少女は腰を落とし、切っ先を魔物に向けたまま腰に溜め。

「てりゃぁぁぁぁぁぁ！」

気合いとともに、突き出した。

高速で繰り出される突きは、《四つ目狼》まではまったく届かない。

が。

剣から放たれた炎は、空中で見事な火球を造り。

轟音を上げながら《四つ目狼》に襲いかかる。

見開かれた四つの瞳の持ち主は慌てて飛び退ろうとするも。

その下半身が、火球に包まれた。
胴から下は一瞬で消し炭に。
残る上半身も、断末魔の叫びとともに、砕け散った。
玲斗はただ、ぽかんと口を開けて見ていることしかできなかった。
――彼女の背中は、見た目よりも大きく見えて。
――『彼』に重なって見えた。

そんな玲斗に、少女は叫ぶ。
「アンタは逃げて！　死んじゃうわよ」
死。
少女は必死だが、玲斗はそれを実感できなかった。
美少女の出で立ち。紋章。異形の獣。見たこともない結晶。光。
魔法。
現実味（リアル）を感じるには、目の前の光景は余りに幻想的（ファンタジー）過ぎた。だが、飛ん
でくる火の粉は熱いし、周りの光景も、夢としては出来すぎている
くらい鮮明だ。

（あの獣は間違いなく、『マジック＝マネー』に出てくる魔物だ。それに、さっきの魔法。あれは確か、中級火系魔法の《フレイムボール》……）

そして、ある一つの可能性、一般人には「有り得ない」と一蹴され、親友堀川には「お前、遂に危ない人になっちゃったか」とか言われるであろう結論にたどり着いた。

（――俺、『マジック＝マネー』の世界に来ちゃったんじゃ）

あれか。所謂『召喚』とか言う奴だろうか。

人は超常現象に直面すると、己の理解可能な範疇で辻褄合わせを行うらしい。

馬鹿みたいな話だが、人間の本能に従って強引に辻褄を合わせようとすると、こうなる。

（それなら、さっきの《四つ目狼》。あれの残骸には……）

目を向けると、焼け焦げた草の上に、幾つか光る物があった。

玲斗は目を凝らし、自分の仮説がどうやら正しいと思わざるを得なくなった。

『マジック＝マネー』では、魔物を討伐すると、その強さに見合

ったお金がその場で手に入る。それをこの世界で忠実に再現しているとなると。

《四つ目狼》の頭があった場所に、六角柱の結晶が幾つも転がっていた。

剣を振って纏わり付く火の粉を飛ばしている少女に駆け寄りながら、さっきの魔物、《四つ目狼》のゲーム内設定を記憶の底から引っ張り出す。

（確かストーリー終盤の魔物で、連係攻撃を得意にしていた魔物……ん？）

何かが引っかかった。

ストーリー終盤ということは、いいだろう。単純に強い、と言うだけだ。

連係攻撃は、複数の個体に囲まれないようにしながら一体ずつ確実に攻撃魔法を。

（……『連携』、『複数の個体』？）

玲斗の思考がたどり着くのと、背後から強烈な殺気が放たれたのは、ほぼ同時。

「――くっ」

身体を前に放り出すように飛ぶ。

チェック柄の服の背中を引き裂き、《四つ目狼》が直前まで玲斗がいた地面に刃を突き立てた。

悪寒が背中を駆け抜ける。

「立って！　早く！」

草地に腹をしたたか打ち付けたが、痛みをこらえて、声に向かって転げるように距離を取った。

膝をついて、再び現れた《四つ目狼》銃を構える。

赤髪の少女が玲斗の背後に立ち、両手で片手剣を構えた。

「脱出できないか？」

「無理ね……囲まれてるわ」

「――ッ！？」

素早く視線を這わせる。

――グルゥゥウウ

うなり声が三方から聞こえる。

玲斗の真正面を頂点に、綺麗な正三角形を描いて《四つ目狼》が対峙していた。

逃げることは出来ない。

出来ることは、ささやかな抵抗くらいだろう。

「……っ、くく」

「ちょっと、何笑ってんの」

そう言う少女の口も、端が上がっている。

玲斗は三体の悪魔に隙を見せないよう、ゆっくりと立ち上がった。

紫の唾液に濡れた歯茎を剥き出しにし、魔物達は徐々に距離を詰めてくる。

さて、と、玲斗は努めて明るく、背後の少女に声を掛けた。

「魔法は、あとどれだけ使える？」

「ゼロ。銅結晶と鉛結晶が数個よ。傷つけることは出来るかもしれないけど」

少女はふん、と鼻を鳴らし、諦めたように続けた。

「私が突っ込んで一体抑えるから、アンタは逃げて。これだけあれば、肉体強化くらい出来るでしょ」

そう言って、銅色の結晶を玲斗に押しつけてきた。

勝手に話を進める少女を放置し、玲斗は必死に計略を巡らせる。
武器は拳銃と片手剣。
望みの綱である魔法も、絶望的。
三方を魔物に囲まれ、脱出は不可能。
絵に描いたような、絶体絶命の危機。
（せめて、あと一回でも魔法が使えれば……）
討伐した《四つ目狼》から、結晶を――。
討伐した、《四つ目狼》。
「これでも『ミューガイト王国立騎士団』に所属してるんだから、魔物の一匹位……」
「おい、有ったぞ。打開策」
「……ホント？」
訝しむ声が、玲斗の耳に届く。
玲斗は真っ正面の魔物を睨み付け、「ああ」と息を漏らした。
「無理よ。ヤツら、そこらの魔物とは格が違――」
「俺は安眠妨害する奴だけは、絶対に許せないんだ」
後ろで少女が首をかしげている。
玲斗は受け取った三つの銅結晶を握り直し、口を開いた。
「君は走って結晶を拾ってくれ。俺がヤツらの動きを一瞬止めるか

ら」
「あれでしょ。最初に狩った魔物の結晶。私も考えたけど、包囲網を突破するなんてそれこそ無理よ……待って、アンタ、『動きを止める』って？」
玲斗は首を縦に振る。
後ろで溜息をつく声が聞こえた。
「銅結晶三つで発動する拘束術なんてたかがしれてるわ。結晶の質と数が魔法に影響するのは知ってるでしょ」
玲斗は押し黙る。
『マジック＝マネー』の世界では、通貨である結晶を魔力として使用し、魔法を使う。それは、単純に使う金額によって威力が左右されるのだ。魔力の純度が高い順に、金、銀、銅、鉛結晶となる。その差は各結晶で丁度百の差がある。つまり、金結晶一個は銀結晶百個と等しく、銀結晶一個は銅結晶百個と等しい。
単純計算だと、先程の少女が使った中級火系統魔法は、銀結晶一個。銅結晶三個では、威力も効果も、たった三パーセントだけしか期待できない。
あくまで、ここが『マジック＝マネー』の世界だとしたら、だが。
そうこうしている内にも、魔物は距離を縮めている。
風は止み、木々のざわめきも聞こえない。

耳に届くのは、自分と少女の息づかいと、悪魔どもの舌なめずり。

一つ、短く息を吸って、大きくはき出す。

「いいから。俺はまだ死にたくないし、君だってそうだろ」

「そ、それは……」

「合図したら飛び出せ。君まで驚いて腰抜かすなよ」

「〜〜〜〜〜〜わかったわよ！」

軽口を飛ばすと、玲斗は今度はしっかりと、銃の照準を魔物の眉間に合わせる。

にじり寄る魔物。

乾いた唇を舐めると、血の味が広がった。

飛び込んだ時にでも切ったか。

目を見開き、一瞬のタイミングを待つ。

一歩、二歩。

草を踏みならし、《四つ目狼》が迫る。

息を吸った。

その時。

魔物は僅か身を屈め、足の太さが一回り大きくなったように見え。

「今だっ！」

少女は一気に駆け出し。

玲斗はトリガーを絞った。

爆音。

突然響く轟音に、魔物達は一瞬、たたらを踏んだ。

その、一瞬で、少女は二匹の《四つ目狼》の間に飛び込む。

玲斗の目の前、乗馬用の馬ほどの高さがある狼が、揺らいだ。

眉間から逸れた鉛玉が、獣の右上の眼球を抉っていた。

――グゥゥガァアアアアア

手負いの魔物が絶叫して頭を振ると、辺りの草に赤い斑模様が描かれる。

二発、三発。

乾いた破裂音が森中に木霊し、鳥の群れが喚きながら飛び立った。

胸、前足を抉り取られ、《四つ目狼》は己の血溜まりに顔を突っ込んで倒れた。

目を後ろに向ける。

無傷の《四つ目狼》が、今にも少女に飛びかからんとしていた。

が。遅い。

「焼き付くせっ！」

十数メートル先で、既に少女は、両手に一個ずつ銀結晶を握っていた。

吹き上がる火炎は、身を屈める獣の脚を焼き。

もう一体は飛びかかるも、時間差でなぎ払われた紅蓮に飲み込まれた。

煤と、肉が焼ける匂いが辺り一帯を支配する。

あとは深手を負った《四つ目狼》にトドメを刺すだけ。

そう、視線を前に戻す。

玲斗はその時ようやく、自分の失態を悟った。

立っていた。

三発もの『．４５ＡＰＣ弾』を喰らっていたのに。

咄嗟に狙いを付け直すも、それは余りに遅すぎた。

既に《四つ目狼》は駆け出している。

涎と、血を振り撒き。
眼球を奪った仇に向かって体当たりを仕掛けてくる。
（……拙い）
距離約十メートル。
引き金を引く。
が、銃弾は《四つ目狼》の肩口を掠め、後方へ飛んでいった。
仮に当たっていても、止まりそうにない。
背中を冷や汗が伝う。
膝が笑い出した。
（ここまで、か？）
玲斗は諦めて目を閉じかけた。
「諦めんなっ！」
後ろからの叱咤。
玲斗は閉まる瞼をこじ開け、がむしゃらに跳んだ。
「――っ――！！」

ザリッ、と布が裂ける嫌な音を間近で聞いた。
それだけで竦み上がりそうになる。
（くっそ、まだだ。俺はまだ、まだ死にたくなんかないんだ）
歯を食いしばって立ち上がる。
――グゥルルルル
殺気のする方へ銃口を向け、引き金を引く――。
はずだった。
「うそっ、銃は……」
避けた弾みで、落としてしまったらしい。
黒光りするＭｋ－２３は《四つ目狼》の丁度股の下に落ちていた。
緩慢な動作で振り向き、犬歯を剥き出しにする悪魔。
漂う腐敗臭と鉄の匂いに、目尻に涙が浮かぶ。
「――こっち！　魔法を使って！」
少女の声が飛び、ハッとなった玲斗は辺りを見回す。
騎士風の衣装を纏った少女は、玲斗を巻き込んでしまう威力の魔

法を使えずにいた。

だから、少女は振りかぶって、『それ』を投げた。

白銀の尾を引き、綺麗な放物線を描いて『それ』は玲斗の手中に収まる。

受け取ったものは、銀結晶。

受け取ったのは、いいのだが。

（……どうやって使うんだよ、魔法）

項垂れかけた瞬間。

玲斗の脳裏に、黒色のマントを身に纏った白髪の老人の姿がよぎった。

『魔法を使うには、魔法を選び、使う金額を決めて発動するのじゃ。選べる魔法は、様々な方法で習得するのじゃが、発動には相応の「想像力」が必要なのじゃ』

――想像力。

（ありがとう、ＮＰＣのおじいさん）

とりあえず、打開策を提示してくれたゲームキャラに、心の中でお礼を言ってみる。

この世界が『マジック＝マネー』なら、全ての法則はゲーム設定に基づいているはずだ。

パラメータとして表された『想像力値』は、玲斗自身の想像力に相当するはず。

出来ることは、他にもうなかった。

銀結晶を握りしめた右拳を突き出す。

（想像しろ。炎を。燃えさかる、紅蓮の劫火）

沸き上がる高揚感。

初めて魔術を使う興奮。

先程の少女と同程度。

紅蓮の奔流が魔物を飲み込み、消し炭に変える様を思い描き。

「頼むっ」

光が弾けた。

「……？」

（あれ？）

玲斗は右手を覗き込む。

銀結晶は、跡形もなく消えていた。

だが反対に、魔物は未だ健在で。

炎が出るどころか、何も起きなかった。

「アンタ、何この土壇場で魔法失敗してんのよ！！」

少女がもの凄い形相で怒鳴り散らしていた。

（やってまった！）

後悔先に立たず。

「うわっち！」

振り下ろされる鎌爪を、間一髪、身を捩って避ける。

完全に体勢が崩れた。

再び腕を振り上げる魔物に対し、少女は魔法を発動する。

火系統より効果範囲が狭く、中級よりコントロールが容易な下級魔法。

水の塊が《四つ目狼》に直撃。

しかし、結果はその巨体が僅かに揺らぐだけだった。

バシャッ、と玲斗の顔にも水がかかる。

「下級魔法じゃ無理。中級使って！」

（中級なんて使えそうにないんですが……）

顔にかかった水滴を袖で拭いつつ、玲斗は思案する。

（でも、何だこの、力が上手く使えていない……使い足りない感覚は）

限界のはずなのに、まだまだ全力を出せていない妙な感じ。

だからといって、どう考えても玲斗に魔法の素質は無さそうだった。

しかし、これは『マジック＝マネー』の世界観に反する。

お金さえあれば高い位の役職に就け、貯金があれば大魔法使いにもなれる。人間の素質など、些細な問題に過ぎない。それが、ゲームの全てだった。それに反するということは、世界観そのものを否定することになる。そんな所行は、神であるクリエイターにしか許されない行為――。

（そうか！　圭祐の『改造』の影響か）

この世界が堀川圭祐によって創られた世界ならば、イレギュラーが存在しても不思議ではない。その『主人公属性』が玲斗自身に反

映されているとしたら。

（確か、『魔法の制限はあるが、複数の魔法を組み合わせることで臨機応変な戦闘を味わえる』だったよな）

思考の海に沈んでいる玲斗の前で、既に魔物は体勢を立て直していた。

少女の悲鳴が、遠い。

左手に握りしめていた銅結晶三本。

「やるしかないだろ！」

腹に力を込め、己を鼓舞する。

――グガァァアアアア

《四つ目狼》が大きく口を開く。

地獄への門が開かれたように、玲斗には見えた。

「あああああああああああああああああああ！！！！」

少しでも気を緩めたら、壊れてしまいそうになる程の、恐怖。

（――――――っ！）

突き出す左腕の先。

銅結晶が、弾けた。

そのうち二本は淡い水色の光を放ちながら、拳の前に水球となって現れる。

しかしそれは、先程少女が放った物とは圧倒的に少ない。

透明の塊は、魔物の醜悪な咥内を更に歪めて映しだした。

異臭を纏った涎が迫る。

それを打ち払うように、緑の閃光を放ち、風が水球を取り囲んだ。

最後の一本の、銅結晶の正体。

玲斗はイメージする。

眼前でめまぐるしく回転する強風は、水球を包み込んで、徐々に小さくなる。

水を、風で、圧縮するイメージ。

僅かに動きを鈍らせる《四つ目狼》。

唖然としている少女を横目に、玲斗はイメージの流れを最終段階に移す。

体積が三分の一ほどになるまで圧縮された水球。

内側からの圧力を、風をコントロールして押し込めた。

（一点。針位の穴。魔物に向けて――）

瞬間。

風に、穴が開いた。

「――薙ぎ払えっ！」

出口を得た水が、一気に極小の穴から溢れ出す。

一閃。

清水の光線は、玲斗の腕を振る動作に連動し、横方向に振られた。

――水圧カッター。

肩が脱臼しそうになる猛烈な反動に耐える。

全ての水を放出し終えた時。

玲斗の目の前には、首の付け根から綺麗に両断された灰色の胴体と、驚愕に見開かれた三つの目を持つ首が、それぞれ離れた場所に転がっていた。その周囲には、深紅に染められた草が横たわっている。

（……勝った）

認識した途端、押し寄せる疲労感と安堵。

仰向けに寝転んで、そのまま玲斗は意識を手放した。

００１話（後書き）

筆が乗る≠描写の上手さｏｒｚ

００２話

○第一章・００２

『……も、仮にも恩人だ……男だからって、放っとく……』

「……う、ぅん？」

浮上していく意識を覚醒させ、玲斗はうっすらと目を開ける。直後、強烈な光に顔をしかめた。

（あれ？　デジャブ？）

数十分前に味わった雰囲気に首をかしげながら、腕を突いて上体を起こした。

「……そうよ、これは試練」

「う、おはよ」

「きゃぁぁあああ！！」

突如耳元で上がった金切り声に、玲斗は跳ね起きた。くわんくわんする耳を押さえ、うっすら涙が浮かぶ目で犯人を睨み付ける。

「……こんなエグい起こし方初めてだぞ？」

「ごっ、ゴメン」

玲斗の目の前には、五体満足でしゅんとなっている少女の姿。衣服にところどころ傷や血痕があるが、問題は無さそうである。日の

高さもそれ程変わっていなかったので、少し寝ていただけだろうと当たりを付けた。

「ま、安眠は守ったからよしとするか……」

ぽつりと呟くと、玲斗は思考を切り替えた。必要なのは、情報。脳内を整理する玲斗に、少女は申し訳なさそうな声で話しかけた。

「え、えっと。私はフェルシア＝インクラット。アンタ、名前は？」

「……早瀬、玲斗だ」

先手を取られた玲斗は、僅かに狼狽した。不審がられることは分かっていたが、返答に詰まる。偽名を使おうかとも思ったが、流暢に日本語を話す西洋風美少女は、明らかに違和感があった。

「ハヤセ、レイトね。分かったわ。さっきはありがとう、ハヤセ」

屈託のない笑みを浮かべるフェルシア。不覚にもドキッとしてしまう玲斗。久しく下心丸出しの大人達と、機嫌を損ねないように接するクラスメイトの愛想笑いしか向けられていなかったから、当然であろう。

「名前で呼ぶんだから、私のこともフェルでいいわ」

そんな青春男子の葛藤を無視して話を進めるフェル。しかし、その言葉の中に、玲斗は違和感を覚えた。すぐに正体に気付いたので、声が裏返らないよう留意しつつ、口を開く。

「悪い、名前が玲斗で、苗字が早瀬なんだ」

「え、そうなの？　じゃ、改めてよろしく、レイト」

「ああ、こちらこそよろしく」

特に問題なく自己紹介が終わったので、早速質問してみることにした。

完全に身体を起こし、その場に胡座を掻く。

飛び散っていた魔物の鮮血もいつの間にか消え、辺りは焼け焦げた草以外は元に戻り、穏やかな木漏れ日が差していた。

「ところでフェルさん。ここは何処？」

「さん付けなんて止めてよ、くすぐったい。え、っと、たぶん学園の東側じゃないかな」

「学園？」

玲斗は森の中に学校があるのか、と思いつつ繰り返した。そんな彼に、目を丸くしながらフェルは問いかける。

「レイトは学生なんじゃ……あ、じゃあ旅の人？　うーん……」

「……何か問題が？」

腕を組んで形のいい眉を寄せるフェルに、困惑して尋ねた。

「改めて聞くけど、依頼を受けて来たわけじゃないのよね？」

頷く玲斗。すると、フェルは一層眉をひそめた。

「ここは学園――クロラケス魔法騎士学園の所有してる森なのよ。学園に入学してる生徒なら、多少は勝手に魔物を倒しても問題は無いんだけど」

「つまり、俺は人様の土地を荒らした不埒者、ってこと？」
「悪く言えばそうなるけど……。仮にも襲われたわけだから、情状酌量位は認めてくれるんじゃないかな」

若干、土地に使う神経が過剰なように玲斗には思われた。

（土地、領土……いや、本来の目的は魔物の管理か）

魔物の特徴を思い出す玲斗。魔物を討伐すれば、お金が直接手に入る。これだけ考えると、魔物を倒し続ければ簡単に富豪になれるように思われる。けれど、それはゲームの話。無尽蔵に魔物が湧き出てくるゲームとは違い、嫌にリアルなこの世界では、魔物の生殖数にもある程度の法則性があるのだろう。有限数の魔物に宿る、現金。

そこまでたどり着けば、その後の展開を予想するのはそう難しくないだろう。

無法地帯の土地では当然のように、魔物の乱獲が始まる。強力な魔法が使える者――主に貴族や王族などの高所得者によって貨幣が独占される。強者の懐は雪だるま式に温かくなり、貧しい人々は収入が得られず、やせ細るしかない。

（だからこその、『所有権』か。厄介だな）

玲斗に原作知識があるとは言え、ここまでの洞察力は目を見張る物がある。しかし、見抜いたところで状況が好転するわけがなかった。

「一先ず、学園に連れて行ってくれないか。謝罪した方がいいだろ」

提案して立ち上がると、「分かったわ」とフェルも後に続く。

玲斗は辺りを見回し、愛銃Ｍｋ－２３と白の鞄を探した。拳銃は特に異常は見られず、鞄は幸いにも戦闘に巻き込まれた様子はなかった。安全装置をかけ直し、鞄を肩に掛けて背負う。振り返ると、フェルが腰を屈め、ふた房の毛を手に取っていた。

「それは？」

「あの狼の尻尾よ。一応、戦利品は取っておきたいしね。これ、鞄の中に入れてくれない？」

玲斗は手を伸ばし、尻尾を受け取る。陽光に煌めくグレーの毛は、絹のように滑らかで、思わず溜息をついてしまうほど温かだった。鞄の蓋を開け、形が崩れないよう丁寧に仕舞う。

「行きましょうか。また別の魔物に襲われるかもしれないしね」

「そんなにたくさん出るのか？」

「入学試験が昨日まであってね。試験中は狩りが禁止されるから、魔物も多少だけど多いのよ。繁殖期に入る頃だから、魔物達も気が立ってるだろうしね」

フェルは一抹の迷いもなく、草木の間を縫っていく。その動きは身軽で、玲斗は周りに咲く色とりどりの花や、瑞々しく輝く若葉に目を向ける余裕はなかった。眼前で規則的に踊る、ひと房の艶やかな赤い髪に付いていく。

「レイトは何処から来たの？」

「……」

至極当然の疑問だったが、玲斗にはこの上なく聞いて欲しくない質問だった。折角警戒心を抱かせなかったのに、「異世界から来ました」などと言って精神異常者扱いされてはたまったものではない。

「……え、っと」

「あ、ああ、いいのよ。言いたくないことは言わないで」

「助かるよ」

言い渋る玲斗に、フェルは慌てて付け足した。願ったり叶ったりだったので、少し後ろめたさを感じたが、有りがたく逃げさせてもらった。

しかし、それっきり口をつぐんでしまったフェルに、段々罪悪感が込み上げてきた。玲斗は柄にもなく雑談を開始することにする。

「フェルの胸――」

もの凄い勢いで睨まれた。

「――に付いてる紋章は『王立騎士団』の物なんじゃないか！！？」

「え？　あ、言ってなかったっけ？」

猛烈に勘違いされ、玲斗は冷や汗を掻きつつ早口に言葉を紡ぐ。少し過剰すぎないかと思ったが、玲斗の失言だったのも事実だ。

聞き終えたフェルは気まずそうに頬を掻いた。フェルは綺麗な『回れ右』をし、踵をそろえて流れるように敬礼する。

「私は『ミューガイト王国立魔法騎士団第一中隊一等騎士』フェルシア＝インクラットです」

違和感は、確実に潰す。それが、玲斗の信条だった。

「フェル、ここはグリーズ共和国なんだよな？」

「ううん、ミューガイト王国領内だよ」

訝しげに否定するフェル。玲斗は記憶をたぐり寄せながら口を開いた。

「ちなみに、さっきの魔物の正式名称は知ってる？」

フェルは左右に首を振った。

「あの魔物《四つ目狼》は、グリーズ共和国領内の森でしか現れないんだ」

ゲーム本編での物語終盤。グリーズ共和国奥地に位置する首都鳩続く道程に、一本の大河とそれを取り囲むように森が広がっている。その密林の奥地に生息しているのが、《フォウアイズ・ウルフ》こと《四つ目狼》。ゲームバランスから、相当レベルの高い魔物だった。強靱な爪の攻撃で一気にＨＰを持って行かれた記憶は、そう昔のことではない。

凶悪な魔物が外国に流れた、というのは、問題であろう。

しかしフェルは、別段気にした様子はなかった。

「共和国の魔物が紛れ込んだのね。危険ではあるけど、そう言うことは偶にあるのよ」

「……そうか」

玲斗は僅かに引っ掛かりを覚えたが、輪郭が上手く掴めない。思案する内にも、二人は森を西へ、西へと進んでいく。

「もうすぐ着くわよ」

声に意識を外へ向けると、次第に土地が開けてきていた。玲斗は前方へ目を凝らす。低木のトンネルをくぐった先。

「……おぉ」

「学園の城壁よ。壁に沿って進めば、門に着くわ」

巨大な壁がそそり立っていた。

薄墨色の石で組み上げられた城壁は、十メートルほどの高さがある。玲斗は父の仕事に付いて行った時、世界中で様々な建築物を見ていたが、思わず感嘆の声を漏らしてしまうほど立派な物だった。

しばらく歩いた後、これまた立派な門をくぐって敷地に入る。意外と近かったか、と玲斗は思ったが、すぐに肩を落とした。目の前には青々とした芝が生えた広大な庭が広がっている。建物は影は見えるものの、まだかなり距離がありそうだった。

「今更だけど、勝手に入ってよかったのか？」

「何が？」

「いや、スパイかもしれない人間を簡単に入れてしまっていいのかと」

「レイトって、実は密偵だったりするの？」

横に首を振る玲斗に、可笑しそうにフェルは笑った。変なことを

聞いたかと思い返したが、特に思い当たらない。事実、門の衛兵は玲斗の格好を物珍しそうに観察するだけで、特に持ち物検査もせず通してしまったのだ。

何の気なしに見た頬笑むフェルの横顔は華のように美しく、玲斗は動揺しかけた。しかし、板に付いたポーカーフェイスで無表情を通す。

「戦争も終わってから長いし、外交も問題無いからね。あれでも一応、チェックはしてるのよ？」

「……そうは見えなかったんだが」

「うーんと、衛兵の一人さ、眼鏡掛けてたの覚えてる？」

玲斗は先程の兵士を思い出してみた。赤を基調とした服装に、鉄製の鎧と盾を装備した二人。右手に持つ槍までは同じだったが、確かに一人は銀縁の眼鏡を掛けていた。

「あれは魔法具の一種で、魔力の流れが見えるのよ」

「成る程。それで持ってる金額を計るのか」

結晶は言わば魔力の塊だ。大量に持ち込めば、それだけ危険度が上がる。

「お、察しがいいわね。でも、もう一つ。レンズを通して見た人の、潜在魔法能力まで見られるの。レイトはその数値が低かったから、お咎め無しだったんじゃないかな」

――潜在魔法能力。

おそらく《四つ目狼》との戦闘時、玲斗が中級魔法を使えなかっ

たことと関係があるのだろう。数値はやっぱり低いのかと若干落ち込んだが、玲斗は「警戒心を抱かせないならいいか」と思考を切り替えることにした。

「そうか、道理で……何か妙に視線を感じるんだが」

校舎に近付いてきたためか、そこかしこに学園の生徒が見受けられるようになった。紺色のローブを纏った少年少女が玲斗達を見て、声を潜めている。大方、自分の黒髪や服装が珍しいのだろうと無視していたが、玲斗はその中に異質な物を感じた。

一つは、見も凍るような冷酷な視線。男子、加えて一部の女子から放たれるそれは、玲斗を串刺しにした。視殺でもする気だろうか、と思わず身を竦ませる玲斗。もしかしなくても、原因はフェルだろう。整った顔立ちにメリハリのいいスタイル、加えて性格も申し分ないと来れば、人気が出ないはずがない。

しかし、あと一種。嫉妬とは違う、むしろ好意的な感情のはずなのに、何故か冷や汗が止まらない感覚。

『……フェル様の隣にいる人……男性、よね？』
『いえ、フェル様が汚らわしいオス共とあんな親しげに言葉を交わすはずがないわ』
『そうね……それじゃあ、あの方は』
『黒い髪、白い肌、長いまつげ、大きな瞳……成る程ね』
『ええ、間違いなく』
『『『黒髪の美少女』』』

「何でだよ」

慣れたか、と問われれば、慣れたと玲斗は答えるだろう。

生まれてこの方、初対面の人に聞かれる最初の質問が『性別』である玲斗。自分の顔に嫌気がさすことは何度もあったが、「どうしようもない」と最近では割り切れるようになっていた。しかし、割り切ることと気にすることは別問題で。

異世界でもこれか、とかなり落ち込んだ。

「……今更だけど、レイトって、男子だよね？」

膝から崩れ落ちそうになった。

玲斗は流石に冗談だと思ってフェルを見たが。目が笑っていない。

「……勘弁してくれ」

さめざめと泣いて困らせてやろうかと、割と本気で考えた時。

眼前にそびえる建物に気が付き、玲斗は絶句した。

西洋風の建物は、城と言うよりはとてつもなく巨大な屋敷に近い外観だった。東西南北、十字に煉瓦で校舎が組まれ、それぞれ四階ほどの高さがある。各方位の先端を曲線で結べば、野球ドーム一個分ほどの大きさは優にあるだろう。直方体二つが垂直に交わった交点は、周りの倍の高さがあり、屋根の頂点には蒼い旗――ミューガイト王国の国旗が、春の風になびいていた。

しかし、玲斗が思わず立ち止まってしまったのは、このためではない。

（この建物……『マジック＝マネー』では『宿屋』だったはず。それが、何故ここに？）

臨海に位置する港町の一角に、確か似た風貌の宿屋があったはずだ。当然この校舎より小さく、国旗もなかったが。

「付いてきて。学園長室に案内するわ」

呆ける玲斗に声を掛けると、フェルは東に延びる校舎に消えていった。

背中に刺さる視線に背を屈めつつ、玲斗は後に続いた。

四階まで普通の階段で上がった後、長い螺旋階段を登り、一番奥の扉の前に行き着いた。

ノック。

「……どうぞ」

玲斗の背丈の倍ほどもある壮大な両扉の中から、胴間声が届いた。

一瞬、「げ……」とフェルの頬が引き攣ったが、コホンと咳払いして。

「失礼します」

と、気を取り直した様子で取っ手を掴んで、引き開けた。フェルの肩越しに室内を見渡す。木造の落ち着いた雰囲気の室内には、左右に天井まで届く本棚が並んでいた。綺麗なものや、ぼろぼろなもの、様々な背表紙が整然と並べられている。部屋の中央、深紅の絨毯が伸びる先には木製の大きな机が置いてあり、その奥には観葉植物に囲まれた窓から、西に傾きかけた太陽が覗いていた。

学園長室、と言うより書斎のようだと玲斗は思った。部屋には、たった今入室した玲斗とフェルの他に、二つの人影がある。

「フェルシア＝インクラットです。ただ今休暇を終え、学園に戻りました」

「……そうか。そして、その……人物は？」

言い淀む、先程の胴間声。絶対性別が分からなかったんだな、と内心で怒ったり嘆いたりと忙しかったが、玲斗は努めて無表情のまま、口を開いた。

「お初にお目にかかります。はや……レイト・ハヤセと申します」

名乗りを上げ、頭を下げる玲斗。名前で一悶着起こすのも面倒だったので、先手を打っておいた。フェルの横に並んで、二人の人物の返事を待つ。

「自分はエドガー＝クルツ。当学園の秘書を務めている」

重低音の声の持ち主で、如何にも戦士という立派な体格を持つエドガーは、事務机の脇に直立している。腰につっている両手剣も、

彼の体格のためか一回り小さく見えるほどだ。顔の彫りは深く、ツンツンした金髪が似合っている。琥珀色の瞳が油断無く、鋭い目つきで玲斗を観察していた。

その左隣。ゆったりとした革製のソファに腰掛け、初老の男性が腕を組んでいる。深い青色の瞳が、玲斗達に向けて優しげに細められていた。顎には白い髭を蓄え、ロスマングレーの髪をオールバックに撫で付けている。

「ようこそ、我がクロラケス魔法騎士学園へ。儂が学園の長、イヴァン＝ゴールじゃ。さて、早速じゃがレイトとやら。用向きを聞こうかの」

先を促され、先ずはフェルが、魔物に追われるようになったいきさつを語った。

「私と同行していた、王都に向かう旅団が魔物に襲われたんです。私は殿を買って出て、魔物を引きつけて逃げる内、森にいたレイトと出会いました」

森、学園、そして王都キャスティーンは、一直線上に並んでいる。フェルは森の向こう、レイグの街から旅団とともに学園へ向かっていたらしい。

玲斗は森でフェルと出会ったところから話を引き受けた。異世界から来たことは巧みに隠しつつ、《四つ目狼》に襲われたことを大まかに話す。途中、自身の身の上は『両親を亡くし、放浪中の身』で通すことにした。

話が進むにつれてエドガーの表情が曇っていくのが見て取れ、玲

斗は背筋に冷たい物を感じた。室内に不穏な空気が広がっていく。落ち着かないのか、フェルもそわそわしており、最後に玲斗が鞄の中から《四つ目狼》の尻尾を取り出した時。

鈍い金属音が室内に響いた。

「貴様、やってくれたな……」

殺気の発生源であるエドガーが身の丈ほどもある分厚い両刃剣を片手で操り、切っ先を玲斗に突きつけた。

「待ってくださいクルツ教官」

「君は黙っていろ」

剣呑な空気に、フェルが慌てて二人の間に割って入ろうとするが、エドガーの抜き身のナイフのような一睨みで硬直する。エドガーは再び玲斗を見据え、重々しく口を開いた。

「《四つ目狼》はグリーズ共和国に生息する魔物。本来、彼の国に掛け合ってから手を出すのが筋なのだ。放浪者なら、それくらい知っていて当然であろうに」

「……申し訳ありませんでした」

生憎、玲斗はこの世界の住人ですらないので知るはずがないのだが、素直な振りをして頭を下げる。エドガーは剣を構えたまま玲斗に近付く。右耳に着けたルビーのイヤリングが、緩慢な歩調に合わせて踊った。一層表情を険しくしたエドガーが、怒りを押し殺すようにして続ける。

「犯罪者風情がのこのこと……。犯した罪、しかとその身で償って

もらおう！」
「教官！」
「……如何なる罰も、受ける所存です」
「落ち着くのじゃエドガー。済まなかったの、ご両人」

声を荒げるエドガーに、今度こそ食って掛かるフェル。対照的に、玲斗は飄々としたまま頭を垂れた。

そんな中、老人の仲裁が割ってはいる。我に返ったのか、一瞬ハッとなったエドガーはしかし、渋面を貼り付けたまま定位置に戻った。無論、剣は鞘から抜いたままである。

「エドガーは切れ者なんじゃがな。如何せん気が短くてのう」

髭を撫でつつ、眼を細めて詫びを入れる学園長。だが、柔らかい表情に、所々苦い顔が見え隠れしていた。

「……しかし、困ったのう。話を聞く限り先に襲われたのじゃから、罰則も軽くなるのじゃが。相手がグリーズ共和国の魔物では、そうも行かんし……。フェルシア殿は生徒じゃから、王宮にも当学園の領地として押し通せば、無罪放免でも構わんのじゃが……」

ふむ、と唸ると、それっきり学園長は黙り込んでしまった。

相当骨が折れる事態になったと、今更ながら玲斗は後悔し始めた。爪を噛みたい衝動に駆られたが、ぐっと堪えて沈黙に耐える。

フェルはお咎め無しと言うことで胸をなで下ろしていたが、数分とは言え背中を預けた少年の窮地に気が気ではなく、気遣わしげに玲斗を見詰めていた。

数十秒――玲斗自身には数十分に感じられたが――ほど経った頃、「……そうじゃ！」と、妙案を思い付いたのか手を打ってはしゃぐ学園長により沈黙は破られる。

「そうじゃ、レイト・ハヤセ。貴殿を我がクロラケス魔法騎士学園に入学させよう」

（（（……は？））））

絶句する一同。弾き出した名案に、学園長は満足げに頷いている。

「待ってください学園長！　何処の馬の骨とも知れぬ者を生徒として迎え入れるなど、不用心にも程がありますぞ」

驚愕から立ち直ったエドガーが意見するも、学園長は「何が拙いか分からない」といった様子で頬笑むばかり。流石の玲斗も、動揺を隠しきれなかった。

「何者も、学園に入る前は素性など分からぬ物じゃて。それに、『王立魔法騎士団』のフェルシア殿の力を借りたとは言え、限られた条件で《四つ目狼》を打ち倒すほどの実力者。これほどの逸材をみすみす逃がしては勿体ないであろう。……どうじゃ、レイト殿。学園に入学してはどうじゃ？　さすれば、無罪放免としてやるぞ？」

悪戯っぽく微笑を浮かべる老人に返す言葉を、玲斗は一つしか持ち合わせていなかった。

「お言葉に甘え、有りがたく入学させていただきます」

「学園長！」

「よいではないか、エドガー。唯のならず者がこれほど礼儀正しいはずは無かろう」

話は終わったとばかりに、学園長は手を鳴らす。

これ以上は無意味だと諦めたのか、エドガーはあからさまに溜息をついて剣を戻した。目は玲斗を睨み付けたままだが。

「確かもう一人、今日付で生徒になった男児がいたの。寮制じゃから、相部屋になる相手じゃ。丁度よい、一緒に暮らしてもらうとしよう。そろそろ戻る頃じゃて」

はて、と首をかしげる玲斗とフェル。

その時、勢いよく階段を駆け上る音が室内に響き出す。さり気なく扉の前から身体をずらすと、まるで計ったかのようなタイミングで戸が開かれた。

ノックもせず、唐突にやってきた客は、少年だった。黒い髪に、漆黒に輝く切れ長の目。

（……おいおい、まさか）

この世界に来て初めてのはずなのに、玲斗はその横顔を知っていた。美少年で通る顔立ちに、白のキャップを被った少年。見間違えるはずがない。

「おっさん、窓拭き終わったぞ～」

言葉の端に疲れが滲み出ている少年の声に、どこかで否定してい

た玲斗の疑念も確信に変わった。

玲斗はその少年に声を掛けようと口を開きかけた、が。

「だっ、誰がおっさんか！　貴様という奴は――」

「まあまあ、ご苦労じゃったの」

「ったく、人使いが荒いぜ」

「何を言っておるか！　学園に忍び込み、卑猥な顔付きで女子生徒を眺めていた罰がこの程度で済んだこと、有りがたく思え！」

「だってよ～。金髪、銀髪、赤、青、緑。胸もＡＡからＧまで選り取り見取り。こんな桃源郷を満喫しない男なんて、もう男辞めてんじゃねぇか」

（……気のせいだったか）

ふう、と溜息をついた玲斗だが、握りしめた手はこれでもかと言うほど汗ばんでいる。この言動、つい先日『初版限定版ギャルゲ買ってきたぜ！』と言って玲斗の自室に駆け込んできた人物と瓜二つだったが、絶対に認めたくなかった。

隣ではフェルが引き攣った笑みを浮かべている。

すると、突然少年が鼻をひくつかせ始めた。玲斗とフェルは隅に寄っていたため、視界には入っていないだろう。一同、小首をかしげて見守っていたが。

「……美少女の匂いがする！」

変態か。

ぐるんと室内を舐めるように見渡す少年から逃れるように、フェルは玲斗の背中に隠れた。大人達は呆れて肩をすくめるばかり。

「……おぉ！」

「――ひっ……」

目ざとくフェルを見つけた少年は、感嘆の声を漏らす。短く悲鳴を上げるフェルに構わず、その華奢で白い手を取ろうとしかけた。

が。

その手前、フェルを隠すようにして立ちはだかる玲斗に目を向け、目を丸くする。玲斗は半眼で、少年を冷たく見下ろしていた。

「……おまっ、その美少女と見紛うほどの女顔、もしかしなくても玲斗じゃねぇか！」

「人違いです」

親友、堀川圭祐との感動の再会――になるはずだった対面は、限りなく残念な形で始まったのだった。

００３話（前書き）

早速ですが、助言を頂いたので加筆・修正しますｍ（＿＿）ｍ
感想待ってまーす＾＾

００３話

○第一章・００３

「さて、圭祐。どういうことか話してもらおうか」

学園長室で入学手続きを終え、職員室でしてもらったフェルと別れた後。教師陣に入学試験と手続きを終え、寮に入った玲斗は圭祐と膝をつき合わせていた。それぞれ自分の決めたベッドに腰掛けている。

室内はそれなりに広かったが、玲斗の自室と比べてしまえば、かなり見劣りした。しかし、綺麗に掃除された室内は白の壁紙と相まって、清潔感を引き立てている。二つ並べられた木製の勉強机、クローゼット、タンス等々、備品も整っていた。

唯一不服を漏らしたのは、風呂。各部屋に備え付けの物があるのだが、蛇口がない。フェルの話によれば、水魔法を使って水浴びをするのだとか。熱い湯船に浸かりたい玲斗だったが、渋々受け入れるしかなかった。

「えー、っと。何処から話せばいいのやら……」

圭祐はと言うと、胡座を掻いてくつろいでいる。日はもうすぐ落ちようとしており、茜色に染まる夕日が二人の頬を染めていた。

言い淀む圭祐に、玲斗は嘆息する。このままでは埒が開かないと、玲斗の方から切り出すことにした。

「それじゃあ、どうやって圭祐は『こっち』に来たんだ？」

「『マジック＝マネー』を改造したソフトを起動したら、だな。玲斗もか？」

「……ああ」

それでは玲斗自身と状況は変わらない。元の世界へ帰る手掛かりになるかと思ったが、見当外れだった。

「次。ここは『マジック＝マネー』の世界、それも圭祐が『改造』したソフトで間違いないか」

「ちょくちょく違うんだけどな。けど、大方そうだ。この学園も、ビジュアルは『宿屋』から引っ張ってきて引き延ばしたそのままだからな」

圭祐は人差し指でベッド、正確には校舎を指す。

「……なら、圭祐が手を加えた場所以外、『マジック＝マネー』内での設定に乗っ取っている、と」

「俺も世界全部を見たわけじゃないから断定は出来ないけど。それで合ってると思うぞ」

玲斗は顎に手を当てて考え込む。

圭祐は所在なさげに、お気に入りの帽子を指で弄んでいた。

「……俺が中級魔法を使えなかったのも、下級魔法を同時に扱えたのも、その『改造』の影響で間違いないな」

「おまっ！　早速魔法使ったのか！？」
「おい、寄るな落ち着け暑苦しい」

一瞬で目を輝かせた圭祐は、帽子を放り投げて玲斗に掴みかかった。玲斗は顔を引き攣らせながらも、何時ものように引き剥がす。

尚も目で催促する親友に、溜息をつきつつ玲斗は学園に辿り着くまでの出来事を語った。一度学園長室で纏め直していたし、先程とは違って隠すこともない。盗聴を恐れて、部屋の外に気を配りながらではあったが、幾分気楽だった。

「貴様ッ！」

だから、話し終えた直後、再度圭祐に掴みかかられた時、玲斗はまったく反応できなかった。圭祐の顔が、いつになく真剣だったのも原因の一つ。

よく分からない性格をしているが、圭祐は何事にも真剣で、真っ直ぐだ。いい意味でも悪い意味でも。玲斗は唯一尊敬し、信頼できる友人の言葉を、固唾を飲んで待つ。

「異世界に来て早々女の子といちゃつきやがって！」
「ホントいい性格してるよ、お前は」

鳩尾に拳を叩き込むと、圭祐は変な声を出してベッドに蹲った。

馬鹿丸出しの親友と、真剣になってしまった自分の愚かしさに内心頭を抱えたが、気を取り直して会話を進めることにする。

「お前が起動したソフトも、俺と同じ設定なのか？」

「……玲斗もさり気なくいい性格してるよな」
「五月蠅い黙れ、さっさと答えろこのおたんこなす」
恨めしそうな視線を一蹴する玲斗。
圭祐はようやく身体を起こした。下腹部をさすってはいるが。
「はぁ……。それが、ちょっと違うんだよ。主に、主人公設定が」
「ふむ？」
「玲斗に渡したソフトは、設定が『下級魔法のみ使用可、同時発動可能』だったろ」
頷く玲斗。それを確認して、圭祐は続ける。
「反対に、俺のは『全魔法網羅、先読み、情報開示』なんだ」
「……よく分からないんだが」
「つまり、だ」
圭祐は得意気に胸を張る。するとおもむろに立ち上がり、玲斗の鞄を漁り始めた。
「相変わらず小綺麗だな……お、あったあった」
おもむろに取り出したのは、赤銅に輝く結晶。玲斗はフェルとの別れ際、「持ってて損はないから」と、《四つ目狼》から手に入れた結晶を丁度半分もらっていた。
ほい、と圭祐は銅結晶を玲斗に投げ渡す。
「それで、何か魔法を使おうとしてくれよ」

「室内で使うのは拙くないか？」
「ランプに火を付けるのも、顔を洗うのも、掃除するのも全部魔法頼みだろ？」
「それもそうだな」

玲斗は自分の頭の回転が鈍くなってきているのを感じた。既に日は沈み、夜の帳は降りている。思い出したように訪れる睡魔に、玲斗はベッドに倒れ込みたい衝動に駆られたが、状況確認を最優先することにした。

「ん、じゃあいくぞ」

薄暗い室内で、玲斗は目を閉じる。

二本の指に挟まれた銅結晶が、淡い光を放つ。

（想像しろ。ランプに灯る大きさ。柔らかく、温かい――）

「――『火』だな」
「っな！」

胸の内を読まれ、泡を食った様子の玲斗。銅結晶は赤銅色に輝くだけで、火系統魔法の面影はまったく映していない。理由を考え出した玲斗は、すぐに『先読み、情報開示』の意味に気が付いた。

「こんな感じに、相手の起こす行動が分かっちゃうのが『先読み』ね」
「チートか……」
「五月蠅ぇよ！　ちなみに『情報開示』はほぼ全ての情報が数値化されて見えるんだが……玲斗の潜在魔法能力、ブハッ」

「な、幾つだ、教えろ！」

圭祐は盛大に吹き出した。玲斗もフェルの言動から常々気になっていたので、先を促した。

「ぷっ、くく。聞いて驚くなよ？」

生唾を飲み込む玲斗。今回ばかりは、圭祐の含み笑いが非常に不愉快だった。

そして、圭祐は右手を『パー』に開いて突き出す。

「……五？　五百万か。少ないが、まあそんなもんだろ」

「いや、ちが……」

「うん？　五千万？　だったら中級魔法使えるだろう……おい、笑うな貴様」

綺麗なシーツがぐちゃぐちゃになるのも構わず、圭祐は大爆笑する。目尻に涙を浮かべて抱腹絶倒する彼に、玲斗はいよいよ不安になってきた。

光り続ける銅結晶を灯火に変え、天井から下がるランプに点けた。部屋が仄かに明るくなり、圭祐のクシャクシャになった顔が見て取れる。

「圭祐、いい加減に――」

「ご、五百だよ」

未だにヒーヒー言っている圭祐に、玲斗は首をかしげた。

「何だ、やっぱり五百万なんだろ。中級魔法が使えないんだから、仕方ないじゃないか」

再び、爆笑。

「だ、だから、五百だって」

「……？」

「きっちり、五百円玉の、五百」

「マジで？」

「……ぶっ」

再度、大爆笑。

閑話休題。

数分後、寮の一室では、抱腹から立ち直った圭祐と、当分立ち直れそうもない玲斗がベッドに倒れ込んでいた。

「あー、笑った笑った。腹筋痛ぇー」

「……しくしくしく」

「気にすんなって、魔法が使えないわけじゃ「五百……」ない、ん、だ……くくく」

倒れ込む玲斗は枕に顔を埋め、笑い続ける圭祐を睨み付ける。

圭祐に寄れば、「『同時発動可能』の魔法に中級魔法以上も含めると、ソフトのスペック的に容量オーバーだから制限した」とのこと。もっともな理由に、玲斗は引き下がる。納得は出来なかったが。

「それじゃあ、圭祐の数値は幾つなんだよ」
「『９９９，９９９，９９９，９９９』」
「……聞いた俺が馬鹿だった」

圭祐自身の『改造』なのだ。最高クラスの数値であることは容易に想像できる。これが圭祐の言う『情報開示』なのだろう。不貞寝しようと、玲斗は身動ぎして人心地付いたが。圭祐の至って真面目な呼び掛けに、僅か首をもたげる。しかし今度は、ベッドの上に正座をして唇を引き結んでいた。漂う緊張感に、玲斗も居住まいを整える。

「さて、こっからはマジな話な」

俺は今までも本気だったんだがな、と茶々を入れかけたが、玲斗も空気を読んで一つ頷くだけに留めた。

「俺が改造したソフト、ある目的を達成すればゲームクリアだと、置き手紙に書いたよな」
「確か、『最強の魔物を討伐せよ』だったな」
「ああ、そうだ」

嫌に歯切れが悪いのも、喋りにくいことなのだろうと玲斗は推察した。

だから、背中を押してやることにする。

「さっさと話してくれ。これじゃ埒が開かん」
「そうだな……。じゃ、単刀直入に言うぞ」

それでも圭祐は顔をしかめて、言い渋る。

訪れる沈黙。俄に階下が騒がしくなってきた。夕食時なのだろう、生徒の談笑が最上階の一部屋にも届いてくる。

突然、圭祐ががばっと立ち上がって。

「すまんっ！」

思いっきり、玲斗に向かって頭を下げた。

いきなりすぎて玲斗は目を白黒させる。圭祐はそれっきり、また黙ってしまった。

暗い顔でも、イケメンだと絵になるんだな等と玲斗が馬鹿なことを考え始めた頃、ようやく口を開いた。

「これ、無理ゲーなんだ」

（……は？）

意味が分からない。

「ゲームの最終ボス、『鬼神』は絶対に倒せないんだ」

突然のカミングアウトに、玲斗は戸惑った。普段おちゃらけた圭祐が暗い影を落とすのだから、余計質が悪い。

真っ先に浮上した言葉。「ふざけるな」と。

喉の奥まで出かかったが、圭祐を見て、必死で玲斗はその暴言を飲み込む。当然だ。こんな泣きそうな目をしている友達に、叩きつけられる言葉ではない。

「ストーリー上、これから起こる『予定』の戦争で現れる『鬼神』を倒さないと世界が崩壊することになってるんだ」

（……世界の、終わりか）

ＲＰＧでは良くありがちなストーリー。字面で理解できるものの、玲斗は実感として受け入れることは出来なかった。何より、想像が出来ない。

停止しかける頭を必死で回転させ、情報をそろえる。

「『鬼神』のスペックは、分かるか？」

「それが、完全には分かっていないんだよ」

「おい、圭祐がプログラミングしたんだろ」

訝しげに尋ねると、圭祐は溜息をついた。自嘲気味に笑う圭祐が玲斗の不安を煽るも、何とか抑えて聞き入る。

「まさか、庶民の高校生がそんな高度な改造できるわけ無いだろ。ベースは、ネットで偶然見つけたプログラムなんだ」

ぽつぽつと語る内容を、玲斗は頭の中で再構成する。

ネット上で無料配信されていた『マジック＝マネー』専用プログラム。それをダウンロードして改良を加えたのが、玲斗のソフトだった。

手始めに圭祐が挑戦したが、最終ボスが倒せず、リセット。

試行錯誤の後、『下級魔法限定、相乗効果あり』設定を加えたものを制作、プレイするも、これまたリセット。これが、玲斗の手に渡ることになる。

もう一度、主人公のパラメータＭＡＸ、さらに『先読み、情報開示』を加えたソフトを作り出し、起動した瞬間、光に包まれた。という事らしい。

「成る程な。一応、ちゃんと起動していたのか」

「何言ってんだ。親友に不良品なんて渡すはず無いだろ」

この台詞は玲斗の胸に『来る』物があったが、

（……無理ゲーは不良品じゃないのか？）

と思った瞬間冷めてしまった。

『鬼神』のスペックは、次の通りらしい。

曰く、詳しい発生条件は一切不明。

曰く、容姿はヒト型。

曰く、全魔法耐性がある。

曰く、防御、敏捷パラＭＡＸ。
曰く、武器攻撃で体力は削れるものの、分母（最大ＨＰ）が多すぎて視覚的にはダメージが分からない。
曰く、全魔法網羅、使用制限無し。

「無理だな」
「ああ、無理だ」

どうやら、玲斗版のソフトでは、自己強化魔法を掛け、武器攻撃で倒そうとしたらしい。

そして、最新版では魔力耐性を力押しで破ると言う方針で創った物だとか。

ストーリーは知らないのか、と聞いたところ「完全にネタバレしたＲＰＧなんて、誰もやらねーよ」と至極当然な返答が帰ってきたので、議論は行き詰まってしまった。

（どうやってもクリアできない、無理ゲー。どうすれば元の世界に帰れるんだ？）

と。

玲斗は違和感を覚える。答えは、すぐそこにあった。

「待てよ圭祐、別にクリアを目指す必要なんて無いじゃないか。問題なのは、どうやって元の世界に帰るかだろう？」

そう。

クリアと、脱出は必ずしも等しいとは限らない。脱出に焦点を当てれば、『鬼神』討伐は十分条件に過ぎないのである。

「方法は、あるには、ある。だが、実質的に不可能だ」

「と、言うと？」

「俺の最上級魔法の中には『転移』がある。必要な魔力は移動距離によって変わるんだが……」

「転移て。圭祐、元の世界の座標なんてどうやって割り出すんだよ」

魔法は、魔力を想像した形に変化させて行使する。それが抽象的であればあるほど、無駄な魔力を消費するだけなのだ。しかし、それも想像できればの話。違う世界の座標軸を、どうやって設定するのか。

「玲斗。俺の脳内恋愛は異世界でもフルスロットルだぜ！」

「本当に、残念な奴だよ、お前は」

常に脳内には百を超える幼女から熟女の設定に加え、全て異なる詳細設定を記憶し、加えてそれぞれの妄想デートだけで千を越えるデートパターンを妄想したと豪語する圭祐だ。

流石に当時はドン引きだったが、今では軽く流せる程耐性が出来てしまった自分に、胸恐ろしさを覚え始める。そろそろ友人関係を見直そうかと、しみじみと思う玲斗であった。

「加えて『情報開示』能力もあるしな。ただ……」

「魔力結晶か？」

「そう。金結晶、三百個分」

サラッと吐かれた大金に、玲斗は言葉を失った。

自分の声が震えるのを自覚する。

「圭祐、鉛結晶一個が、丁度一円位の価値になるよな」

力なく頷く親友を横目に、ざっと換金してみる。

（……金結晶が鉛結晶の、十の六乗分の価値。それに三百を掛けるから……）

――三億。

「俺の小遣い三年分じゃないか！」

「……レイト、キサマ、コロス」

「ちょ、止めろ圭祐、お前完全に目がイってうわぁあああ！」

閑話休題。

「貴様ッ、それだけ金があれば、どれだけ限定版のギャルゲが買えると思ってやがル！」

「言いたいことは分かったから。お、落ち着け圭祐」

玲斗は『早瀬グループ』社長の息子。食品から玩具、洋服から自動車と幅広く手を伸ばしている『早瀬グループ』は、日本でも有数の企業に上り詰めていた。

彼の価値観で見てしまえば、三億円もお小遣いに見えるらしい。

しかし、親の力を借りるわけにはいかない異世界。高校生二人が求める金額としては、まさに雲を掴むような話だろう。

冗談の応酬に、沈んでいた圭祐も調子を取り戻したらしい。が、取っ組み合いを開始して間もなく、マウントポジションを取ると、再び真剣な表情をして切り出した。

「……三ヶ月だ」

玲斗は、圭祐の所思について行けなかった。

「戦争が始まるまで、あと三ヶ月しかないんだ」

（……つまり）

――三ヶ月で、三億稼げ。

「……無理ゲー」

「だから言ったろ」

思わず口を突いて出てしまった言葉に、圭祐も同意する。

三億は、一般的サラリーマンが一生を掛けてやっと稼げるお金だ。コネもない一介の高校生が、多少の『チート』能力だけで手に入れるのは到底無理な話である。

だが。

「……やるぞ、圭祐」

襟を掴む圭祐の屈強な腕を上から握り、玲斗は言い切った。

突如発せられた言葉の意図に気付き、圭祐は目を見張る。

「本気か？」

頷く玲斗に、圭祐は苦虫を噛み潰したような顔をした。

「ゲームとは違って、俺達だって体力に限界はあるし、夜中まで金稼ぎするわけにもいかんだろ。物理的に――」

「やってみなきゃ、分からんだろ」

ピシャリと言い放つ。

玲斗は僅かに語気を強め、その漆黒の瞳に確固たる意志の光を宿す。仰向けの状態から起き上がり、親友を見据えた。

「……俺には、帰る場所があるんだ。帰らなきゃいけないんだ。方法が分かっているなら、俺は挑戦してやるよ。……圭祐に強制はしないさ。だが、俺は――」

「……っだーー！！　わーった！　分かったよ！」

大声を出して両手を挙げる圭祐。しばらく、気まずそうに目をそ

らしていたが、溜息をついて拗ねたように言った。

「言っとくがな、ここは二次元美少女の桃源郷だぞ！　二ヶ月！　それだけ協力して帰る目処が付かなかったら、俺は遊び呆けるからな」

「……助かるよ」

正直なところ、玲斗は自分の我が侭に付き合わせる形になり、後ろめたさを覚えていた。だが、例え異世界でも自分の味方に付いてくれる親友に心底感謝する。

「んじゃあ、さっさと寝るか。明日早いし、今日は窓拭きで疲れたんだよ」

そう言って、圭祐は自分のベッドの潜り込むと、すぐに寝息を立て始めた。寝付きの良すぎる親友に苦笑しつつ、玲斗もランプの明かりを消す。

暗闇が訪れた室内を、青白い月明かりがぼんやりと照らし出した。

「……うっ、まだ夜は冷えるな」

ガラスの嵌められた窓を開けると、冷気を纏った一陣の風が玲斗の頬を撫でていった。散々回転させて火照った頭に心地よさを感じる。見上げると、そこは満天の星空だった。幾万の星々が、闇夜に巨大な川を引く。生まれて始めてみる光景に、玲斗は歓喜とともに一抹の寂しさも同時に覚えた。

（……父さん、母さん）

ここは違う世界だと、改めて突きつけられた。

頭を振って、玲斗は窓を閉める。そのままベッドに倒れ込むと、押さえつけていた睡魔が一気に玲斗の身体を支配した。そのまま身を、柔らかいベッドに預ける。

数分後、玲斗から規則正しい寝息が聞こえてきた。

――枕の下に、拳銃を握りしめて。

◇◆◇◆◇

校舎の西、女子寮の四階の一室。

「……そうか。ま、偶にこういう内容の報告書が王宮に来るらしいからな。何より、無事で良かったよ」

「うん、ありがとアレク」

普通の部屋より一回り大きい部屋には、三人の美少女が住んでいる。水浴びから上がったフェルは、艶やかな深紅の髪を櫛で梳いていた。淡いピンクのパジャマに身を包み、髪を下ろした彼女は、昼間とはまた違った華やかさがある。引き締まった健康的な脚が、寝間着の裾から伸びていた。

フェルはとりあえず、今日の出来事を簡単に纏めて友人に話した。

フェルの視線の先には、ベッドに腰掛け、脚をぶらつかせている少女。肩口で切ったブロンドの髪は太陽のように煌めき、美少女と呼んでおつりが来るほど色白で整った顔立ちをしている。

「……ま、狼などに後れを取っては『王立魔法騎士団』の沽券に関わりますからね。ですが、気を付けてください。姫が心配します」

丁寧な言葉遣いにサラッと悪態を挟んだのは、分厚い書物に没頭している物と思われていた銀髪の少女だった。彼女もフェルや、姫と呼ばれた金髪の少女――アレクセア＝ル＝ミューガイトと同様、端整な顔立ちに整ったプロポーションを兼ね備えている。勉強机の前に腰掛け、本からは目を話さずに口を開いた。

「姫、何度も言うようですが、いい加減その『趣味』も、少しは自重してもらえませんかね？」

突如変えられた矛先に、アレクセアは「……うっ」と言葉を詰まらせた。

「……い、いいじゃないか。武器集めは私の崇高な趣味なのだ。見ろ、この洗練された刀身を。如何にも実戦的で美しいじゃないか」

「アレク、また武器買い込んだの？」

アレクセアは恍惚とした視線を、己の手の内にある短刀に向ける。鞘から抜かれたそれは氷のように鋭利で、無駄、と言う概念がまるでないかのように流麗な姿を晒していた。貴族が持つ、宝石が散りばめられた物とは違い、実用的で簡素な物である。

呆れ返るフェルは、アレクセアの振り回す『新しいコレクション』を半眼で見詰め、次いで部屋の壁を見渡した。

真っ白な壁紙の上に飾ってあるのは。

武器。武器。武器。

今アレクセアが握っているような短刀から、片手剣、両手剣、両刃剣、刀、槍、ハンマー、メイス、ダガー、ナイフ、弓、銃、盾、鎌、兜、鎧、手甲、具足、などなどが所狭しと並んでいる。

ここがうら若き乙女達の寝室とは、夢にも思わないだろう。

同じように部屋中を眺め、「はぁ……」とフェルと一緒に溜息を漏らした少女――ティアナ＝アーベルを、アクセレアは睨んだ。

「残念だよティアナ、この短刀。荘厳な技巧の程が分からんとは……」

「私の本職は弓ですから」

眉一つ動かさず言い切るティアナに、男言葉の金髪美少女は声を荒げた。

「それでもだ！　ティアナも騎士なのだから、この卓越した職人の才能は分かるだろう」

「そーですねー」

気のない返事を返すティアナ。

アレクセアは再び、短刀に向けて歓心している。

「この鍛冶職人は我が王宮で保護するべきだな、うん。……しかしティアナ、ここでも『姫』と呼ぶのはよしてくれ」

「いえ、流石に公私は弁えなければ」

「ここは自室でしょう？」

口を挟むフェル。

アレクセアは、その姓が国名と同じという事からも分かるとおり、ミューガイト王国の姫君なのだ。現在は学問と武術を学ぶため、クロラケス魔法騎士学園で生徒として勉強に励んでいる。王宮でも教育は受けられるのだが、元来から彼女の快活、好奇心旺盛、男勝りな性分から、「民と同じ目線で過ごしてみたい」――という建前――で、温厚な父である現国王から入学と自由を勝ち取っていた。

そこで、交換条件通して出された条件の一つ。それが、『王立魔法騎士団』隊員である同じ年齢の少女――フェルシアとティアナに護衛を任せる、と言う物であった。

「……ぶっちゃけ、メンドイです」

「「おいおい」」

だが、姫の威厳は有って無いような物だった。しかし、当の本人はこの状況を酷く気に入っているので、本来傅くべき二人も気楽に接している。

「それは置いといてですね、フェルさん」

「ん？　どしたの？」

一拍置いて、ティアナが本から目を外してフェルを見据えた。雑談はほぼしない彼女から話題を振られることは珍しい。しかし、何故かフェルは背筋に寒気が走ったが、首をかしげるばかりだった。ティアナは口の端をつり上げ、面白そうに笑う。

「フェルさんに、彼女が出来たとの情報は本当ですか？」

空気が凍った。

「な、な、無いわよ！　彼女なんて居ないわよ！」
「フェルよ、気持ちは分からんでも……うん、察せないこともないが、流石に拙いんじゃないか？　こう、風紀的に」
「何で言い直したのよ。無いから。健全だから。百合じゃないから」
「でもフェルさん、男苦手でしょう？　本日、外見では性別の判断が付かない人物と楽しげに会話していた、と聞きかじった物ですから、真偽の程を」

当人が聞いたら卒倒しそうなことを吐きつつ、ずいっとティアナが詰め寄る。面白そうな空気を察知し、アレクセアも参戦した。

「どんな人物なのだ？」
「黒髪に黒の瞳。色白で長身。何でも、放浪者なのに丸腰だったとか」
「ふむふむ、で、どうなのだフェル？　男は受け付けんのだから、やはり……」

ティアナの情報網に感心しつつも呆れ、フェルは言い逃れは不可能だと悟った。

遂に観念し、狼狽しつつも口を開く。

「う、まぁ、レイトは男だよ」

アレクセアとティアナの瞳が輝いた。完全に、思春期の少女の目をしている。

身の危険を感じてフェルは後ずさるも、すぐ背後には壁に飾られた長剣が。

「……詳しく聞かせてもらおうか、我が忠実なる家臣よ」

「……問題は彼がどれほどの器かと言うことですね」

「いや、ちょっと二人とも待っ……きゃぁぁあああああ！」

始業式前日、女子寮の四階は消灯時刻が過ぎても明かりが消えることはなかったとか。

◇◆◇◆◇

校舎から僅かに漏れる明かりが、校庭に一筋の人影を作っている。

今は闇に紛れて見えないが、ここは色とりどりの花が咲き誇る庭園。その花で形作られた道を、一人の少年が足取り重く進んでいた。白い帽子を被った圭祐の面影は、普段の明るい物とは正反対。今にも死にそうな顔をしている。

「……俺の、所為だ」

親友の玲斗が寝静まった後、こっそり寮から抜け出した圭祐。彼の隣で暢気に寝ているなど、出来なかった。

原因は、深い後悔。

「玲斗がこっちに来たのは間違いなく俺の所為だ。なのに……」

――ズドン。

拳が太い樹木の幹に叩き付けられた。

青白い月明かりに照らされた木の葉が二枚、漆黒の闇に舞い落ちていく。

「……っく」

血が滲むが、痛みは感じない。それよりも重く、太く、圭祐の心を不の感情が締め上げていた。

(俺は、悪いと思ってるのに、へらへら笑って。でもそうしなきゃ、罪悪感に押しつぶされそうだった。だが)

それは、アイツから逃げていただけじゃないか。

玲斗のトラウマは、幼い頃から付き合っている圭祐には、痛いほど分かる。そんな玲斗の心のより所を、二人も、圭祐は奪ってしまった。

圭祐は拳を固く握りしめる。

「アイツを、元の世界に還す。必ず」

それが、圭祐に出来る最大限の謝罪と、誠意だから。

夜風に持って行かれそうになる帽子を押さえつけ。圭祐はじっと、淡く輝く月を見上げていた。

◇◆◇◆◇

「学園長、本日の《四つ目狼》の件で王都に使いを出しましょうか？」

夜も更け、エドガーはやっとの事で、新入生の書類を纏め上げた。琥珀色の瞳に疲労の色を漂わせている。目頭を押さえながら、尋ねた人物――イヴァン＝ゴールも、やはり疲れたのか、ソファに背を預けて深く息をついた。

「いや、今回の件は王国に知らせてすらおらんかったからのう。わざわざ入学の頃に、下手に生徒の不安を煽る必要も無かろうて。あの二人には堅く口止めしたのじゃから大丈夫じゃろう……。おっと、これは唯の独り言じゃぞ？」

「……」

既に二人が、親友に語っているなど知るよしもない。

エドガーは片目を瞑る老人から視線を外し、席を立った。独り言、と言うからには相槌は打たないほうがよい。食えない老人だ、と内心愚痴を零すが、窓際に立て掛けた両手剣を掴んだ。ブーツで赤い絨毯を踏みつけ、扉の前でローブを翻して向き直る。

「では、私はこれで失礼します」

学園長は老眼用の眼鏡を外しつつ、畏まるエドガーに微笑みかけた。

「お勤め、ご苦労じゃったの。明日は始業式じゃ、忙しくなるであろう、休養するがよい」

一礼し、木の扉を押し開けた。

石造りの螺旋階段を、ぽつぽつと灯るランプが怪しげに照らし出している。如何にも何かが出そうな雰囲気の中、エドガーは自室へ向けて歩を進めた。

（王国に通達しないのは問題だが、俺としても好都合だろう）

灯火の一つが、吊り上がった口角を照らした。

（本当に、食えない老人だ……）

エドガーのローブはやがて闇と同化し、飲まれて見えなくなった。

００３話（後書き）

とりあえず、状況確認と目的の提示をば。

００４話

○第一章・００４

『それでは皆さん、今日は編入と同時に皆さんと過ごすことになった生徒を二人、紹介します』

ドアの向こうから響くどよめきに、廊下で待つ玲斗と圭祐はたじろいた。

二人は現在、『２－Ａ』と書かれたカードが下がる教室の前に立っている。始業式を講堂の最後尾で受けた玲斗達は、一端職員室で手続きを終えた後、連れられた女性教師に廊下で待っているよう言われていた。

彼等の身なりは、元居た世界と同じと言って差し支えのない物だ。グレーのカーディガンを、洗濯されて真っ白なカッターシャツの上に羽織り、制服の黒ズボンを穿いている。唯一違う物は、首に巻き付けて止めた、紺のローブだ。素材は絹のようで、担任の女教師によると、魔法の威力を軽減する加工がされているらしい。

『……二人とも、入ってきなさい』

白の帽子を被った圭祐は、柄にもなく緊張した様子で咳払いをした。玲斗は普段通り、飄々とした態度で圭祐の後に続く。人前に出る、という事に慣れていたため、大して気を張っていなかった。

扉は一部にステンドグラスを張って、取っ手が付いた物。スライ

ド技術――ローラー式でない辺り、やはり文明が違う。

校舎の南側にある教室は大学のキャンパスのように傾斜が付き、固定のテーブルがひな壇状に並べられていた。化学物質が使われていない室内は、純粋な木の香りが漂っている。色取り取りの髪を持つ学生達が、玲斗達と同じ格好で席についていた。

教壇で手招きする黒髪の女教師――リリー＝ブライトナーに促され、二人は隣に並ぶ。ブライトナー先生の隣に圭祐、続いて玲斗の順だ。

教室の喧騒は大きさを増すばかり。

『……ねえねえ、先生の隣の男の子、良くない？』
『うんう……ちょっと、彼、昨日の変質者騒ぎの犯人じゃない』
『それホント！？』
『ああ、昨日罰で窓拭きさせられてたの見たぜ』
『何それ、ショック……』
『あの最後に入ってきた奴！　女みたいな顔してるなぁ』
『え、何言ってんの女の子でしょ？』
『いえ、男子用の制服を着ているのですから男子でしょう』

（……恐ろしいことになってる気がするんだが、気のせいか？）
（大丈夫だ問題無い）

やけに自信満々な圭祐に、玲斗は肩を落とした。

パンパン、とブライトナー先生が手を叩く。長身故の存在感もあってか、教室内は俄に落ち着きを取り戻した。喧騒が苦手な玲斗も、一息つく。

「静かに！　……。さて、先ずは自己紹介をお願いします」

圭祐が一歩前に進み、帽子を取って唇を舐めた。

「俺はケイスケ・ホリカワっす。趣味は読書（ラノベ・官能小説・えろ本）と、買い物（フィギュア・アニメのＤＶＤ＆Ｂｌｕ－ｒａｙ・同人誌）と、ゲーム（全てのジャンル、主にギャルゲ）です。よろしく～」

無難に――詳細はともかく――自己紹介を終えた親友に、玲斗は安堵していた。朝、身支度の合間を縫って差し支えの無い文句を考えただけに、健全に――表面的には――終わった。『ゲーム』は、本人と玲斗以外には『チェス』として取られていた。

続いて、今度は玲斗が進み出る。

「レイト・ハヤセです。よろしくお願いします」

こちらはまったく面白味のない内容。クラスメイトの反応は淡泊な物だったが、目立ちたくない玲斗にすれば、上出来と言えた。

「二人は新入生ですが、諸事情により二学年からのスタートになります。力になってあげてください」

この後は、席についてＨＲ（ホームルーム）だろうと、玲斗は安堵した。

しかし。

あ、とブライトナー先生は何かを思い出したように声を上げる。玲斗達も含めた生徒が注目する中、彼女はにっこりと微笑み、告げた。

原因不明の戦慄を、玲斗は覚える。

が、時既に遅し。

「力、と言えば、二人はまだ潜在魔法能力の測定がまだでしたね」

ブライトナー先生が悪魔に見えた、玲斗だった。

ブライトナー先生がおもむろに一辺十センチほどの、木製の箱を取り出す。木箱には側面の一つに宝石が五つ、横一列に並んでおり、上面に正六角形の穴が開いていた。

「……っ、と、ここに銅結晶を入れて」

気を揉む玲斗を余所に、ブライトナー先生は取り出した銅結晶を上面の穴に置いた。すると仄かに結晶が光り出し、木箱自体も僅かに発光し始める。

玲斗が引き攣っているのを見て取ったのか、先生は淡く頬笑んだ。

「気を楽にして。みんな大差ないし、儀式みたいな物だから」

（……拙い。非常に拙い）

中級以上の魔法が使えない、と言う事実が発覚するのは非常に拙い。下手に注目を集めるし、実力を軽んじられることも多々あるだろうからだ。玲斗の『魔法同時使用』はあくまでチートなのであり、元からこの世界に存在する能力ではないのである。

玲斗は素早く視線を巡らせる。

目に留まったのは、見覚えのある赤髪のポニーテール。目を見張る玲斗に気が付いたのか、フェルは微笑して小さく手を振っていた。笑い事ではないのだが。

「この箱を持って下さい。そうすれば、体内の潜在魔法能力の値に応じて宝石が光りますから」

玲斗の脳が急速回転し、脱出案を弾き出した。

（そうだ！　先に圭祐が計れば……）

潜在魔法能力約一兆の圭祐が先に計測すれば、電流計と同じ原理で内部構造がイかれるはずだ。その場しのぎでしかないが、今はこうするほか無い。

玲斗は咄嗟に口を開く。

「あのっ！」

「じゃあ、レイト君から、ハイ」

「あ、どうも」

木箱を抱え、玲斗は硬直した。

（……あ）

次いで、教室の空気が凍結した。

「「「……え？」」」

隣で圭祐が「ご愁傷様です」と憐憫を込めた眼差しを向けてくるのが腹立たしい。玲斗は恐る恐る、木箱に視線を落とした。

――宝石が、一個だけ、光っていた。

「え、うそ。一個ってことは中級魔法が使えないってことじゃん。アタシ始めてみた～」

そのクラスメイトの一言が、亀裂が入った玲斗の心を完膚無きまでに打ち砕く。

「お、おい玲斗。大丈夫か？」

まさかの惨劇に、圭祐もからかえる状態ではなかったようだ。

俯いて茫然自失とした玲斗は、腕の力を抜いてしまった。玲斗の手から木箱が抜け落ちる。

慌てて受け止めた圭祐だったが、木箱は正確に圭祐の潜在魔法能力を量り取って、玲斗の予測通り――

「お、っと……わ！」

――光を伴って爆発した。

その後。

全身に刺さる視線を感じながら着席する。頭を掻きむしりたい衝動に駆られるが、窓から差し込む柔らかい陽光が玲斗の憂いをほぐした。ブライトナー先生は若干冷や汗を掻きながらも、ＨＲを続ける。

しかし無礼ではあるが、玲斗はそれを聞き流し、別のことを考えていた。

当たり前だが、新入生は一年生からスタートする。玲斗達が一学年飛び級できたのは、単純に下位魔法は全て習得しており、知識も十分以上に備わっていたこと。前者は学園長のお眼鏡にかなったため。後者の理由は、当然ゲーム知識である。先日の入学試験で二人は前代未聞の満点を獲得し、緊急協議が行われたとか。

エドガーが二人の監視をするため、自身の担当クラスに入れたがった、と言う裏事情を玲斗が知るはずがなかったが。

「……は皆さん、一時限目は『魔法学』です。私が教えるので、ちゃんと聞いて下さいね」

こうして、玲斗の波乱に満ちた学園生活が開けたのだった。

◇◆◇◆◇

「っだー、疲れた。何で異世界来てまで勉強しにゃならんのだ」

「仕方ないだろ。俺達には情報が決定的に少ないんだから」

始業式があったため、午前中の授業は二限だけであった。にもかかわらず、圭祐は辟易した様子で玲斗に愚痴を零す。軽く返した玲斗の言葉に、圭祐は顔をしかめた。

「おいおい。ここはゲームの世界。情報って、一体何が……」

「圭祐。この世界の太陽は、何で東から昇って西へ沈むか、分かるか？」

からかっているのかと圭祐は玲斗を睨む。だが、玲斗の目は真剣そのものだった。圭祐はしばらく考える。

終業の鐘の残響がフェードアウトし、生徒達は皆、食堂に足を向けていた。玲斗は机を整え、親友を見る。圭祐は整った顔に力を入

れて脳を回転させているようだが、結論には至らなかったらしい。急にわしゃわしゃと頭を掻きむしると、諸手を挙げて『降参』ポーズを取った。

「分からん。と言うか、質問の意味が分からん」

人気が薄れつつある教室で、玲斗は周囲に盗み聞きされないよう気を配る。

圭祐は続けて口を開いた。

「ったく、何で今更のように、そんな『当たり前』のことを――」

「それだよ、圭祐」

いよいよ混乱してきたらしく、圭祐は腕を組んで黙り込んでしまった。

玲斗は今日の授業と、その間に纏めた事実を、親友に語る。

「圭祐の言う『当たり前』、って？」

「そりゃお前、一般常識だろうよ。お日様が東から西に……というか、地球が自転してるなんて何百年も前に……？？？」

自身の言葉に違和感を感じたのか、圭祐は首をかしげて口をつぐんだ。「圭祐にしちゃ、及第点か」と玲斗は満足げに頷き、説明を開始する。

「いいか？　ここは異世界。俺達の居た世界、地球とは違うはずだ」

「ああ……あ！　そうか、常識って地球の常識だったか」

上手く思考が結びつき、唸る圭祐。

「この『マジック＝マネー』の世界は、魔法以外は地球環境に酷似してる。それも、日本に限りなく近い」

玲斗が語ったのは、次のことだ。

昨日玲斗が見た太陽は西へ傾いて沈んだ。しかも森の中で見上げた太陽は、確かに南側に傾いていた。これは、北半球に見られる軌道。南半球では、太陽は北を経由して進むからだ。

次は、重力。昨夜見上げた星空から、『ここ』は宇宙空間の一つである可能性が非常に高い。そして、『ここ』が一個の惑星であるのもまた然りだ。『ここ』の重力は地球の物と変わらないように玲斗は感じた。と、言うことは、『ここ』は地球と同じ質量を持った星であると認めざるをえない。

そう言ってしまえば、何故太陽があるか。何故空気があるか。そんな根本的な事まで思案していては、時間がいくらあっても足りないのだが。

「……うむ。大体分かったが、何で日本だと決められたんだ？」

「圭祐。如何にも外国人風の女教師は、『何語』をあんな流暢に話してた？」

「成る程……」

決定的だったのは、言語。玲斗が初めて出会ったフェルも、学園長、エドガー、ブライトナー先生にクラスメイト。全員が『日本語』を話していたのだ。

圭祐は納得したように頷く。そして。

「……で？」

「やっぱり分かってなかったな」

呆れたように言うと、圭祐は口を尖らせた。

「んだよ。さっさと結論言えよ。お腹減ったんだよ」

「はいはい。圭祐、お前は今言ったこと、全部プログラミングしたのか？」

今度は圭祐が呆れる番だった。

「何言ってんだ、玲斗。そんな事したらすぐに容量越えちゃうだろーが」

予期していた反応だったとは言え、馬鹿にしたような切り返しにイラッと来る玲斗である。

「そう。プログラムは、極力容量を抑えるように組まれる。そうすれば汎用性も高まるし、レスポンスも向上するからだ」

――だが。

世界に、無駄な物は一つもない。プログラムは、その一部分だけを抜き取って『書き換えた』物に過ぎない。と、するならば。

「事前に書き換えた以外の『理（ことわり）』は、足りない物は全て地球、それも日本の姿を反映している、と言うのが俺の推理だ」

言語も。星も。生物が呼吸し、空気があり、動植物が緩やかに成長するのも。

全て、元の世界の『補完』だ。

ゲームでの『ＮＯＷ　ＬＯＡＤＩＮＧ』の間も、セーブして止まっている間も。『ここ』いつでも等しく、時間は流れているのである。呼吸も、成長も、移動も、全て。

「……そうか、言われてみれば、そうだな」
「うん。で、ここからは推測なんだが――」
「……科学の理論が、この世界で通用するかも、って事か」
「……よく分かったな」

驚きで目を丸くする玲斗に、圭祐は不満げに顔をしかめた。

「俺だってやるときはやるんだよ」
「極偶に、な。結論にたどり着いたところで、結構時間喰ったし食堂に行くか」

そう玲斗が言うと、圭祐は未だに不服そうだったが、空腹には勝てなかったらしい。二人は席を立って、教室を後にした。

◇◆◇◆◇

校舎の中央、つまり直方体の交点の一階。そこは玄関と、玲斗達

が今居る食堂がある。

ここも教室と同じく木造。だが、大人数が座れる長テーブル、椅子一つ一つが、制作者の意匠が随所に施された一級品だと玲斗は見ていた。広さも一般的高校の講堂の倍ぐらいの広さがあり、テーブルを調節すれば、ここで貴族のパーティーでも開けそうである。落ち着いた壁紙に、深紅の絨毯が良く生えていた。

玲斗は我が家の別荘のような風景に感慨を覚えた。

ただ一点、純北欧の調度品に囲まれた、如何にも西洋風の生徒がバリバリ『日本語』を話しているシュールな光景を除けば、だが。

「んぐ。しっかし、まさかカレーがあるとはなぁ！　美味いし」

長テーブルの端に向かい合って腰掛ける玲斗達は、早速昼食を取っていた。圭祐は、真っ先に見つけた中辛カレーを引っ掴み、玲斗の目の前でがっついている。ちなみに、これは玲斗のおごりだ。銅結晶五個分だったので、やはり五百円相当なのだろう。

雰囲気と料理の不一致さも、シュールさの要因かと玲斗は溜息をついた。

それっきり圭祐は黙々とスプーンを動かしていたので、玲斗はミートスパゲティをつつきながら、今日の授業の纏めを開始する。

魔法学――それは魔法の原理、五大元素に関わる話であった。五大元素とは、火、水、雷、土、風。加え、無属性魔法、と言う種類

もある。

その五大元素が、玲斗を化学的思考に導く要因となった。

授業での魔法の発動原理は、「自身に眠る潜在魔法能力を呼び覚まし、ほんの少しの事象を想像することによって『魔法の種』を創る。そうして魔力結晶の魔力を自身の力で制御し、『魔法の種』を増幅させ、発動に至る」と。

ここで注目したのは、『魔法の種』だ。

『魔法の種』を創り出した後の、魔力増幅に使われるエネルギーは結晶から得る。

しかし、果たして――想像するだけで『魔法の種』ができるのか――。

そこでこう考える。

火は、周囲の熱エネルギーを収縮させる。
水は、周囲の水蒸気を収縮させる。
雷は、周囲の静電気を収縮させる。
土は、周囲の重力を収縮させる。
風は、周囲の運動ベクトルを収縮させる。

『魔法の種』は、「できる」のではなく、「集める」。

とするならば、これはエネルギー保存の法則に忠実に従っていると言える。

次は、無属性魔法。

主に《肉体強化》、昔は錬金術にも使われたとか、色々謎の多い魔法系統らしい。

玲斗の記憶にある《肉体強化》は、戦闘時には必ず使用する、と教師が言っていたから、フェルが使っていた物だと推測した。

あの時の異常スピード。炎に撒かれても髪一つ焦げず。鋼の剣を易々と振るった腕。

異常スピードは、魔力なる未知のエネルギーによって、神経細胞――ニューロンが活性化されたからだろう。脳や体中を駆ける電気信号の伝達速度が跳ね上がり、高速戦闘を可能にした、と玲斗は推察する。

傷が付かない身体。これは、魔力の膜を身体全体に張り、皮膚細胞への干渉を防いだ、と考える。細胞の強化によって同じく筋肉も強固になり、《肉体強化》が完成する。

錬金術だが――これはよく分からない。錬金術を突き詰めれば化学に繋がるので、何かヒントがないかと玲斗は考えた。が、その頃には人々はすっかり魔術に依存しており、必要なかったとか。

加え、玲斗にとって都合の良いことに、無属性魔法はランクの概念が存在しないらしい。魔力を変化させず、そのまま『貼り付ける』だけのため、潜在魔法能力は関与しないのだとか。

よって、化学の原理がこの世界で通用する、というのは後は実際にやってみるだけだ。成功したら、それを生かした方法で効率の良い金稼ぎをすればいい。問題は、その手段だが――

「……隣、いいか？」
「おぉ、どうぞどうぞ」

放心状態から浮上してきた玲斗は、目の前で顔をだらしなく弛め、鼻の下を伸ばす間抜け面の親友が。顔を上げると、そこでは金髪の美少女がこちらを眺めている。

背は、見た目高校生では標準的。ただ、スタイルが流石二次元、と言う位整っていた。性欲全開の圭祐が二つ返事で迎え入れるのも無理ない、と思ってはいるが、不用心すぎないかと玲斗が少女に見えないよう睨み付ける。ふいっ、とそっぽを向く圭祐。

内心溜息をつき、こくんと頷くと、少女は礼を言って友人を呼んだ。

どこか見覚えがあると思っていたら、玲斗達のクラスメイトだった事に気付く。

「……ほら、早く行きましょう」
「ちょっ、押さないで。スープが零れる」

（……ん？）

ブロンドにアクアブルーの瞳を持つ美少女の向こうからやって来た人影。二人とも、手にトレイを持って歩いて来た。

一人は長い銀髪。小柄な体型だが、その雰囲気は大人びて見えた。無表情に見える深紅の瞳が、シャンデリアの明かりを反射している。

そして、彼女に押されてやって来たのは。

「……フェル？」
「あ、レイト」

フェルだった。が、何故か顔が引き攣っている。何かしでかしたかと、玲斗が回想を始めた。最後の一口を口に放り込んだ時。

「さて、新入生レイト・ハヤセ君。フェルとの関係を聞かせてもらおうか」

思わずむせ返りそうになった。

フェルは真っ赤になって否定をし、それをしれっと受け流す友人二名。眼前では恨みがましそうに見詰める圭祐（ヘンタイ）。

実験も金稼ぎも、しばらくお預けのようだった。

「……むぅ、それでは昨夜の話は本当ではないか」
「だから嘘なんて吐いてないって言ってるじゃない！」

唸るアレクセアに、フェルが食って掛かる。

昨日の魔物襲撃事件を語り終えた玲斗は、紅茶で喉を潤した。先に食べ終わった玲斗が話していたため、既に全員食事を終えている。先程から目の前で圭祐が「……早速フラグか？　フラグなのか？」と呪詛を送っていたが、玲斗は完全無視。

「成る程、レイトさんはへたれなのですね」
「……リアクションに困るコメントをしないでくれ」

ティアナの辛辣な評価に、玲斗は苦笑いを返すしかない。

既に、五人での自己紹介は終えていた。

ショートの金髪を持つ勝ち気な美少女が、アレクセア＝ル＝ミューガイト。玲斗は『ミューガイト』の姓に引っ掛かりを覚えた。フェルの所属が『王立魔法騎士団』出会ったことを思い出し、彼女は王族か、その親族であると当たりを付ける。

小柄な銀髪ロングヘアーの美少女、ティアナ＝アーベル。彼女も『王立魔法騎士団』の隊員だとか。話によると、弓を好んで使い、遠距離支援を担当しているそうだ。ちなみにフェルは、片手剣での近距離支援らしい。

「しかし、フェルがようやく男友達を作ったか。成長したなぁ」
「ちょっと、何言ってんのよアレク」
「フェルちゃんには男友達は居ないの？」

しみじみとした様子で語るアレクセア。ここぞとばかりに美少女の会話に参加しようと割り込む圭祐。そんな下心丸出しの親友に嘆息する玲斗。

（しかし……）

男の友人が居ないのが、それほど心配する事なのか。気になった玲斗だが、情報が少ない。じっと、斜め前に座るフェルの菫色の瞳を見つめる。

「……な、何？」

溜息。

「いや、なんでも」

玲斗はそう言って、紅茶を流し込んだ。込み上げてきた暗い感情を、全て、洗い流す。

と、自身を訝しげに眺める視線に気が付いた。

「どうしました、レイトさん」
「どう、って？」
「思い詰めたような顔をして居るぞ？」
「っあー、よかったら皆さん。学園を案内してくれないか？　俺達まだよく知らなくて」

玲斗の僅かな変化を感じ取り、圭祐が強引に話を変えた。

目線で問いかける圭祐に、玲斗はアイコンタクトで礼を述べる。目を閉じて、注目が圭祐に向いている間に素早く深呼吸。落ち着いたことを確認し、少々不躾だが三人に尋ねることにした。

「あと出来たら、上手い稼ぎ方、教えてくれないか？」
「……お金がいるのか？」
「そうですね。授業でも結構お金使いますし」
「うん、まぁそうなんだ。ずっと放浪してたから、手持ちがなくて」

流石に目的は言えなかったが、玲斗は悪感を与えずに金銭の話を聞けたので安心する。しばらく考えた後、フェルが口を開いた。

「……やっぱり、ギルドじゃない？」
「そうだな。一番手っ取り早い」
「ですが、ランクによっては面倒ですよ？」
「ケイスケは良いとして、問題はレイトだな」
「二年の最初の授業で使う金額なんて、大したことないはずよ」
「それに、魔物騒ぎも学園中に広まっています。種類は知られていなくても最低ランクから、と言うのはないでしょう」

しばらく蚊帳の外だった男性陣。

二人は声を落とし、身を乗り出している。

（……さっきは済まなかった）

（良いって事よ。しかし、玲斗。一体どうしたんだ。フェルちゃんのことだろ）

言い淀む玲斗。言うべきか迷ったが、圭祐に目で口止めを了解させる。

玲斗にとって重い言葉を、告げた。

（フェルはさっき、俺と同じ目をしていた）

今度は圭祐が、言葉に詰まる番だった。

（……ワケありなのかね）

（たぶん……。ま、俺には関係ないが）

（そんな言い方ないだろう）

（俺がどうすることも出来ないし、することでもないさ）

やれやれ、と圭祐は肩をすくめる。ムッとした玲斗が言い返しかけた時。

「レイトが認められるか、だな」

「そうだけど……。ま、行ってみなきゃ分からないし。先ずはギルドから回りましょうか」

話が纏まったらしく、三人は席を立った。

「よろしく頼む。あ、トレイは？」

「片付けてくれるから良いわよ。じゃ、行きましょ」

三人は手慣れた様子で身支度を調える。慌てて玲斗と圭祐もロー

ブを身に纏い直した。周囲から刺さる好奇の視線を振り払い、一同は煌びやかな食堂を後にする。

無人のテーブルには、玲斗が残した紅茶が一口分、所在なさげに漂うだけだった。

００５話（前書き）

お読み頂、ありがとうございます＾＾

さて、来週の更新ですが……。

テストにより、不可能ですｏｒｚ

二次の方は原作があるから何とかなるんですがね（笑）

済みませんが、ご了承下さい。

００５話

○第一章・００５

校舎、中央の三階。

玲斗達は談笑しながら石造りの階段を上り、再び広大な部屋に出た。

三メートルほどの高さがある扉は開け放しにされている。こちらも食堂と同等の大きさがあった。

ここはギルド。何故学園内に？　と聞いたところ、王立で領地も確保しているのだから、わざわざ正規ルートで依頼をするよりも早いこと。加え、生徒が気軽に実戦経験を積んだり、授業料を稼ぐための配慮らしい。

よって、昼休みという時間帯もあり生徒達の姿も多々あるが、その全てが今入ってきた五人――主に玲斗を注目している。一様に玲斗を眺め、笑い声を零す。それは、明らかな嘲笑だった。

（俺はウーパールーパーか）

等と思わずには居られなかったが、おそらく「女顔の飛び級新入生は、実は魔法の才能が残念」のレッテルが貼られて居るであろう身。しばらく肩身の狭い思いをする羽目になることを考えると、憂鬱になる玲斗であった。

先陣を切っていたアレクセアが青色の瞳で一睨みすると、皆慌てて目を逸らし、それぞれの放課後を過ごし出す。アレクセアは玲斗に渋面を向けた。

「結構、噂になってしまっているようだな」

「仕様がないさ。元々飛び級新入生で噂になっただろうし」

肩をすくめる玲斗にも思うところはあるが、どうしようもない。諦めて受け入れることにも随分慣れたものだと、玲斗は自嘲気味に笑った。

すると、それまで暗黙を守っていたティアナが、思い出したように玲斗へ声を掛けた。

玲斗が僅かに目を下へ向け、深紅の双眸と正面から向き合う。ティアナは無表情に、少しの疑問を貼り付けていた。

「……童顔のレイトさんの潜在魔法能力では、中級魔法は使えませんよね」

「突っ込みにくいところでボケないで欲しいんだが。ま、結局下級しか使えなかったよ」

「認めるんですね、童顔」

玲斗は血の涙を流した。もちろん、心の中で。

話が一気に脱線した事に気付き、修正を促す。ティアナは白々しくも「あぁ、そうでしたね」と、とぼけるばかり。救済を求めて玲斗が辺りを見渡すも、お三方は絶賛失笑中。

「誰かさんの所為で話が逸れましたが」

「お前の所為だ」
「……ふっ」
何その笑い？　と、玲斗が若干不機嫌に。
そんな彼を見、ティアナは口角を上げ、玲斗に告げた。
「ちっちゃい男ですね。そんなだから女顔なんですよ」
「……っ！」
「ちょ、ティアナ言い過ぎ！　遅かったわ……」
昼食で修復した心が再び折れた。
玲斗は顔を引き攣らせたまま硬直。
放心状態の玲斗を圭祐とフェルが二人掛かりで連れ戻し、諸悪の根源ティアナは、主に説教を喰らっていた。
何事かとギャラリーが集まりかけるが、アレクセアの剣幕に気圧され、すぐに散っていく。
途中から変態が「怒るアレクちゃん萌え～」と言いつつ涎を垂らしていたので、結局フェルが玲斗を介抱することに。
「……ちっちゃい男……童顔……女顔……」
「大丈夫！　人間顔じゃないわ」
「……説得力ない」
「うっ、も、問題無いわよ。レイトは十分男らしいわよ」
「……目が左上に動いた」
「へ？」

「……それは、視覚的に物を想像、もとい都合の良いことを考えている時の反応。つまり――」
「んあー！　レイト、戻ってきてー」
簡単に嘘を見破られ、誤魔化すようにフェルは玲斗の肩を揺する。目が死んだ玲斗は未だ、ネガティブ思考のスパイラル真っ直中だった。

さて。

「誰かさんの所為で話が――」
「そのくだりは止めよう。不毛なことになる気がする」
「それもそうですね」

しばらくして回帰した玲斗と、解放されたティアナが話を戻す。
「二人とも、玲斗にあの話は禁句だからな。覚えておいてくれ」
「……分かってる。久しぶりに疲れたわ、精神的に」
「……そうだな、気を付けるとしよう」

呆れた様子で言う圭祐の忠告に、二人はコクコクと頷く。
玲斗の壊れっぷりに辟易したフェルは、密約を胸に堅く、堅く、誓ったのであった。
何事も無かったかのように話す玲斗。眼に光も戻ってはいるが、

やはり表情は薄い。対するティアナも感情を表に出さないので、絵的に不気味ではある。

「レイトさんが下級魔法しか使えないのなら、どうやって魔物を倒したんです？」

実に的を射た質問だった。

「それもそうだ。フェル、どうだったのだ？」

「私も気になってたんだけど。そうよレイト、銅結晶しか使ってないのに、何で水の光線なんか出せたのよ？」

「うん、まあ。機会があったら教えるから」

言い渋る玲斗に、美少女三人は眉をひそめる。

この場で言えない理由が、幾つかあるからだ。

先ずは、人。ギルドのカウンターや、依頼書が貼り付けてあるコルクボードに群がる生徒は、十人やそこらではない。仮にここで魔法を披露すれば、たちまち広まるだろう。今は誰にもばれていないから良いものの、何処に目があるか分からない。犯罪者やテロリストに目を付けられれば確実に標的となり、金稼ぎの効率も少なからず鈍るだろう。

もう一つ。これは、他の三人に言ったら怒られるだろうが。

（……完全に信用した、ってわけじゃないんだよな）

己の人間不信症に、自分でも呆れ果てる玲斗だが、こればかりはどうしようもない。

もし、例えば、仮に。

全てを完璧に信頼できる人など、この世に居ても数人だろう。だが、頭で分かっていても、身体のどこかが警鐘を鳴らすのだ。

――あの時を思い出せ、と。

「はいはい、そこまで。他人の秘密を強引に聞くのはマナー違反よ」

木製のカウンターから、凛とした女性の声が届く。尚も食い下がられている玲斗にとって、それは救いの声に聞こえた。そちらに目をやると。

「ブライトナー先生？」

本日、玲斗が居る２－Ａ担任として世話を焼いてくれた、長身黒髪の女教師が「やほ」と気さくに手を振っている。

教師に注意され、渋々引き下がる三人。未だに未練がましい視線を送ってきている。が、玲斗はさらっと流すことに決めた。カウンターに近付き、妙齢の教師と向き合う。

「先生は、ここで何を？」

「見ての通り、ギルドの受け付け。ハヤセ君は登録だよね。来ると思ってたわ。あ、ホリカワ君もこっち」

どん、と引っ張り出した帳簿を置く。広辞苑級の厚さに、玲斗は目を丸くした。すぐ隣にやってきた圭祐を横目で見、玲斗は軽く身を引く。

にやけていた。涎を垂らして。

「すげぇ……。二次元美少女の桃源郷……。俺は、俺は、ふ、ふふふふふふふ」

「帰ってこい、変態」

圭祐の脇腹に肘を入れ、正気にさせる。変態化した親友を直す手立ては、既に熟知しているのであった。

カウンターは、郵便局のように仕切られた物が五つ。それぞれ教職者か、正規員が着いていた。木製の台は美しい木目が波を描き、角が潰れた帳簿とマッチしている。

「……それじゃ、この紙に必要事項を書いて」

用紙とインク、羽ペンを受け取る。玲斗と圭祐はペンをインクにつけ、名前、年齢と書き始めた。

詳しい記述はされていない。規約に関して、重要そうな所を抜粋すると。

一、ギルドにはランクがあり、それぞれ受けられる依頼が異なる。
一、金銭の管理は、ギルドが責任を持って行う。
一、依頼は複数受けても良い。期限までに完遂すれば依頼達成。
一、依頼失敗は期限の超過、受注者の死亡とする。
一、依頼成功は、物資の調達、及び魔物の一部を提示することで達成とする。

一、目標以外の魔物を狩れば、その時点でペナルティとする。

そして。

「終わったわね。じゃあ、ランク決めだけど」

玲斗は息を飲んだ。これによって、受けられる依頼が変わる。それは直接収入に直結し、文字道理、玲斗と圭祐の生死に関わるのだ。

「ホリカワ君、ハヤセ君は二人ともFランクで良いわね？」

「玲斗だけじゃなくて、俺が最低ランク！？」

「……何とかなりませんかね、先生」

「私はレイトが魔物を倒すところを見てたんです。もう少し上がりませんか？」

「先生、ケイスケさんは素で測定器を破壊するほどの潜在魔法能力を持っているんですよ？」

食らいついて懇願する一同。昨日聞いた話と今朝の測定騒ぎから、ブライトナー先生も考える素振りを見せる。

期待して五人が見守る中、しかし、先生は首を横に振った。

「残念だけど、無理ね」

「何故だ先生。一応実績はあるのだから――」
「えっと、そう言う問題じゃないのよ、アレクセアさん」

ブライトナー先生は、相手が悪かったのか若干狼狽する。だが、こればかりは譲れないらしく、尻すぼみになりながらも語り出した。

ちなみに、彼女だけ名前で呼ぶのは、入学当初にアレクセアがお願い――された側は怯えていたが――したためである。

「ギルドランクは、無闇に命を落とすことを避けるためにあるの。そして、新たな世代を育てる足場となるのも、これらの依頼。当然、高ランクの依頼はそれだけの大金がないと完遂することは出来ないわ。失敗続きで無駄な出費をすることを抑え、人々を守るためにあるの」

優しく生徒を諭す先生。五人は黙り込むしかなかった。

つまり、『はした金で倒せるほど、高レベルモンスターは甘くない』という事だ。実に正論である。

しかし、どんな物事にも『例外』と言う物は必ずあるのだ。

玲斗は考える。

このランクに甘んじて、目標を稼ぎきれない可能性。

力を見せて、厄介事が増える可能性。

二つのリスクを天秤に掛け――傾いた。

「先生、ちょっと良いですか？」

取ったのは、稼ぐことを優先させる。

臆病なままでは、何も始まらないし、動かない。

玲斗はカウンターに身を乗り出し、自分の手元を隠す。辛うじて、他の四人が見える程度だ。

「何をするの？」

「面白いことです」

飄々とした態度で受け流す。しかし、玲斗は内心、この状況を楽しんでいた。

カウンターに、鉛結晶を三つ並べる。

ギャラリーの頭に疑問符が浮かんだ。

玲斗はそれぞれ、左手の指の間に挟み込む。

そして。

――むにゅっ。

（……フェル。当たってるんだが）

フェルが必死に玲斗の手元を覗き込んだ結果だ。玲斗は背中に、柔らかい物が押しつけられるのを感じる。それは柔らかな弾力があり、玲斗の平常心をくすぐった。右胸が早鐘を打つ。玲斗は顔が赤くなるのを感じたが、如何せんどうしようもない。早く事を終えることにする。

煩悩を押さえつけ、精神を統一。

「おぉ……」
「……え！」
「……信じられん」
「……何です？　これは」
「……」

それぞれの言葉で、己の驚愕を表した。

鉛結晶三つ、全てが光っている。

そして有り得ないことに、玲斗の指先には、ピンポン球ほどの火球、水球、風球が踊っていた。

玲斗は十分に彼女らの反応を楽しむと、火球を水球に近づける。

やがて火球は消滅した。

「先生、この水球に指を入れてみて下さい」

コクッと頷き、おそるおそる、ブライトナー先生は指を近づける。

（……びびってるお姉さんキャラ、萌え～）

隣から幻聴が聞こえた。無視。

「……良い湯加減」

「それはどうも」

「温水を直接作るなんて、銀結晶を使わなきゃ出来ないのに……」

白くて細長い、滑らかそうな指が抜かれるのを確認し、玲斗は意識を集中させる。

と、今度は風球がばらけ、水球を取り囲んだ。

一同は、再び目を丸くする。

ひょうたん型。

楕円型。

薄く引き延ばされたり。

小さく縮んだり。

水の塊が、自在にその形を変化させる。その様は、正に魔法。

そろそろ良いかと思った玲斗。だが、温水の処理に困った。まさか床に捨てるわけにもいかない。視線を巡らせると、カウンターの奥にマグカップを見つけた。

「先生、あのコップに水を入れても良いですか？」
「……」
「先生？」
「ひゃいっ！」

ビクッと気を付け。玲斗が声を掛けるまで、放心状態だったのだろう。

了解を取って、水は綺麗にカップへと収まった。

背後で白帽子の変態が身体をくねらせて何か言っているが、玲斗の意識には届かない。と言うか、それ以上に背中からマシュマロが退いたことで、安堵が広がった。

気を取り直し、玲斗はトドメに入る。

元々見せるつもりはなかったのだ。しかし、背の腹は代えられなかった。何せ、圭祐まで最低ランクだとは思わなかったから。

「……自分は、下級魔法を組み合わせることで効果を高めることが出来ます。もちろん、攻撃魔法にも十分対応できるので、ランクを低くする必要はないかと思いますが」

ブライトナー先生は難しい顔をしている。

もう一押しか、と玲斗が口を平食いかけた時、先生は諦めた様子で頭を振った。

「同時に魔法を使える？　こんな、イレギュラーな事態は初めてよ。魔法学では、二種類の魔法を近くで発動すれば、干渉して失敗する

って分かってるのに。……分かったわ。特別に、ランクをCにしてあげる」

（……ま、こんなもんか。後は実力で狩るしかないな）

Cランクは、SからFまでの内、丁度中堅に当たる。先程依頼書を見た限りでは、なかなかの報酬が待っていた。玲斗の背後でも、一気に気兼ねが吹き飛んだ様子。

次いで、親友の交渉に入った。

「それで、次は圭祐なんですが。コイツの力も証明しなければなりませんか？」

「……おぉうっ！」

一斉に注目が集まり、圭祐はうろたえる。

ブライトナー先生は、驚きを通り越して、引き攣った表情であった。

「……彼もCランクにしましょう。しかし」

語気を強くする先生に、玲斗達は身構える。

彼女の瞳は、憂いの光を湛えていた。

「しかし、くれぐれも無闇に命を落とさぬよう。気を付けて下さいね」

二人はその言葉を胸に止める。骨の髄まで、その格言を染みこま

せ。

「「ありがとうございます」」

綺麗に、頭を下げるのであった。

「……成る程、あんな面白い特技があったとは。レイトさんの故郷では、皆あの能力を？」

「いや、俺だけが使えてさ。みんな気味悪がってたよ。重宝は、してたみたいだけどね」

嘘には、嘘を重ねるしか無くなる。

胃に穴が開く思いを続ける玲斗。しかし、これは必要悪だ。そう、言い聞かせる。

「なかなか楽しめたぞレイト。さて、次は武器だな」

アレクセアが妙に生き生きし始めたことに、玲斗は小首をかしげる。それを察したのか、従者二名が顔を寄せてきた。

（……あれ、アレクセアの趣味なのよ）

（あれ、って？）

（武器収集）

それはまた、物騒な趣味をお持ちで、などと失礼なことを考えて

しまう。勉強机にＭｋ－２３を隠している玲斗に言えた義理ではないが。

「そうよ、アレク。あんなに武器があるんだから、ちょっとぐらいあげたって――」

振り返った金髪美女は――修羅だった。

思わず喉が鳴る玲斗とフェル。

「……私のコレクション、何人たりとも手を触れることは許さん！分かったな！！」

「「サー・イエッ・サー！」」

敬礼し、返事をする。

というか、それ以外させない剣幕が、アレクセアから滲み出ていた。恐ろしい限りである。

無事にギルドに登録し終わり、一同はギルドに併設されている武器商に来ていた。もちろん、目的は武器の調達。

「オーダーメイド品の方が手に馴染むし、愛着も湧くのだが、仕方ないな」

とは、アレクセアの談。

注文して作れば、身体にも合うのだが。それだけのお金が、まだ二人にはない。何より、武器が出来上がるまで待つ時間もない。

とどのつまり、既製品の武具を手に入れるために来ているのだ。
ギルドからの支援金で、最低限の装備を調えるための資金はある。
玲斗と圭祐は、物騒な刃物が並ぶ店内を、好奇心と胸恐ろしさを抱えながら吟味していた。
両手剣、片手剣、盾、槍、弓……。
テーブルの上から壁に掛けてある物まで、よく観察しながら玲斗は考える。
（俺の体格からすると、肉付きも良くないし、やはり片手剣か……）
刃渡りが短い方へと進んでいく。
片手剣、と一口に言っても、刃の形状は様々。サバイバルナイフやダガー。刀身の細いレイピア。刀身自体も、様々な色であることから、鉱石の種類も違う。
「……レイトは片手剣？」
「フェルか。ああ、体格的に大降りの剣は振れそうにないし」
「《肉体強化》すれば問題無いと思うけど。ま、武器は信頼できる物じゃないとね」
にこっ、と頬笑むフェル。
玲斗も笑い返すが、内心では別のことに気を取られていた。
（……信頼、か）

武器は何も言わない。故に、裏切らない。だから、信頼する。

その構図はおかしい。

おかしいとは思うが、玲斗は「信頼とは何か」と聞かれた時、明確な答えが返せるとは思えなかった。

（信頼は、俺が信じて初めて成立するのか。けどそれは、ただのエゴではないか）

巡り、巡る迷い。

ただ押しつけているだけの信頼。それならば跳ねっ返されても、文句など言えない。

じゃあ、俺が家族や圭祐に持っている物は、何だ？

フェルやアレクセア、ティアナに求めている物は？

「……盾が……って、聞いてるのレイト」

「ん？　ああ、聞いてない」

「まったく、人が親切に教えてあげてるのに……」

「……すまん」

膨れっ面をして不機嫌になってしまったフェルに、玲斗はただただ謝るしかない。

「む……もう知らないっ」

「だからゴメンって……これは何だ？」

追いかける玲斗の目に飛び込んだ、一振りの剣。

店の隅っこに追いやられ、他の剣に埋もれていたのだが。

刀身は煌めくマリンブルーで、玲斗を引きつけて放さなかった。

美しい、とさえ思った剣を、玲斗は手に取ってみる。

「この剣は何という鉱石で……フェル」

女性と親しくしたことなど皆無に等しい玲斗。ましてや、女の子のご機嫌取りなど出来るはずがない。謝るだけでは駄目、というのは分かるが、ならどうすればいいのか分からない。

と、そこに救いの手が。

「良い物に目を付けたな、レイト」

物陰から出てきたアレクセアが、ローブが引っかからないよう手で押さえながら言う。

「それは、『ミューガイト鉱石』と言ってな。元は『蒼渓石』というのだが。百年前の革命時に、革命軍が主戦力に大量起用したのが、『ミューガイト鉱石』で作られた武器だ。特徴としては、魔法の安定化が含まれている。当時資金面で苦しめられていた革命軍にとっては、とっておきの隠し球だったんだろう。要となった鉱石だから、国の名前が付けられたんだ。しかし反面、物理的な干渉に弱い。つまり、討ち合いには向かないんだな。加え、『安定化させないと魔法が使えない未熟者』というレッテルが貼られてしまうため、使い

手は少ないんだ。残念なことに、な」

アレクセアは眼を細め、美しい意匠の剣を眺める。その瞳は、自分の国の名前が刻まれた鉱石と、世間での評判との狭間で揺れていた。武器収集が趣味の身として、耐えられない物があるのだろう。

だから、と言うわけではない。

しかし、それが全くなかった、と言えば嘘になる。

「決めた。これにしよう」

アレクセアと、そっぽを向いていたフェルまでもが目を丸くして、レイトを見詰めた。

「聞いていなかったのか？　実力を軽んじられるぞ」
「それは今更の話だろう」
「でも、レイトは十分強いじゃない」
「見栄と強さは違うさ」

玲斗は剣の柄を握り、上段に構えて、一気に振り下ろす。

蒼の剣線が、見事な半円を描いた。

「俺は自分の力を知ってる。そして、その力を引き出してくれる剣も見つけた。見栄なんて言うのは、生きていなけりゃ意味がない。意味のないプライドが邪魔をして死ぬ奴は、ただの馬鹿だ」

ブライトナー先生は言った。無闇に命を落とすな、と。

ちっぽけなプライドのために己の寿命を縮めるなど、愚の骨頂だ。

そんな理屈っぽい玲斗を、フェルはやれやれと眺める。

「ま、レイトらしい、って言えばレイトらしいか」

「まったくだな」

呆れた様子の二人も、その表情には微笑を湛えていた。

二輪の花が咲いたような光景に、玲斗は僅かに硬直する。

「どうしたの？」

「……いや、何でもない。次は盾だな。よろしく、二人とも」

「うん、わかったわ」

「任せろ、それも守備範囲内だ。盾だけに」

「……」

「……」

（いや、ないだろ（でしょう））

教訓。不用意なだじゃれは、人々を萎えさせるので慎みましょう。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3217t/

少年は『無理ゲー』の先に何を掴むのか？

2011年6月1日10時21分発行